

鷹と共に生きる

-動物との関係性の構築-

南 香菜子

北九州市立大学文学部人間関係学科

要 旨

本論文では、日本の伝統文化である鷹狩りにおいて、筆者が実際に鷹を調教し、狩りをするまでのプロセスをみていくことで、人は動物をどのように捉え、理解し、動物との関係性を築いていくのかについて、筆者と鷹との関係性の構築を通して見ていく。

狩りを行い、人にも慣れる要素をもつ鷹は、関わり方によって全く異なった性質を持つ個体となる。筆者が鷹と過ごした2年間の中で特に変化が見られた鷹の行動を、筆者が鷹を理解するうえで必要となった「鷹の感情」として分類し、日を追うごとに人に慣れていく鷹と、鷹の本能を失わせまいと訓練に励む筆者の葛藤を「慣れ」と「狩り」のプロセスに分類して記述した。

鷹と関わるにつれて次第に鷹の行動の変化に気が付くようになり、その行動から鷹の意思を見いだすことで筆者は鷹を理解しようとした。この行為が、筆者の鷹に対する愛着形成へとつながり、愛着を抱くことで筆者の狩りへの欲求を低下させ、鷹の本能を保たせる機会を失わせる危険性をはらんでいたのである。それでも鷹は、日々の訓練や行動の中で自ら学び、筆者の知らないうちに野生の鷹としての主体性をもてるように成長していたのである。

人と鷹との関係は常に流動し、はっきりとした関係性をもたない曖昧さを含んでいた。そして人が鷹と共に狩りを行うためには、鷹に対する愛着をコントロールすることが重要となる。したがって、鷹と共に人も成長し、自立することが真の信頼関係で構築されたパートナーへとつながるのである。

目次

はじめに	2-2 道具解説
第1章 ドメスティケーション	2-3 鷹を選択する
1-1 有用動物	2-3-1 雌雄の差
1-2 愛玩動物	2-3-2 育て方による違い
1-3 使役動物	
1-4 複数の要素をもつ動物	2-4 鷹に求めるもの
第2章 人と鷹の関係	2-4-1 オオタカ
2-1 鷹に対する認識	2-4-2 ハリスホーク

2-5 人の鷹に対する考え方

2-5-1 狩りを重視する

2-5-2 ペットとして接する

2-5-3 鷹として見る

第3章 事例 -鷹の行動の変化-

3-1 攻撃

3-2 警戒／威嚇

3-3 逃避

3-4 安心

3-5 興奮

3-6 要求

3-7 葛藤／迷い

3-8 疲労

3-9 遊び

第4章 分析

4-1 慣れのプロセス

4-2 狩りのプロセス

4-3 捉え方の変化

第5章 考察

5-1 筆者の鷹との関係

5-2 鷹の感情

5-3 信頼関係を築く

5-4 信頼の先へ

おわりに

謝辞

参考文献

はじめに

動物の気持ちを知りたいと思ったことはないだろうか？彼らが何を考え、私達のことをどのように見てどのように感じているのだろうか。

筆者は幼少の頃から動物が好きで、動物から近づいてきたり、身体を触らせてもらえたりすると、その動物との距離が近づいたような気がして心地よく感じていた。また、人と動物が共に行動することで成り立つ動物園や水族館のショーに魅力を感じていくと同時に、なぜ人間は言葉が通じない動物たちと共に行動することができるのだろうか、どのような過程を経ればそのような状態になるのかという疑問を抱くようになった。

本論文では、筆者が2012年8月から現在に至るまで日本の伝統文化である鷹狩りに関して、筆者が鷹を調教する放鷹術を学び、実際に鷹と共に行動し、狩りをするまでのプロセスをみていく。そして、人は動物をどのように認識・理解し、その解釈が関係性の構築にどのような影響を及ぼすのかということについて考えていく。

第1章 ドメスティケーション

古くから人は動物たちと共に生き、食し、時には飼いならして利用することで動物との関係性を多様化させてきた。なかでも人は、自分達の暮らしに必要なものを生産するため、自然をドメスティケートしてきた。ドメスティケーションとは、野生植物の栽培植物化、野生動物の家畜化を意味する[松井1997]。ここでは、動物の家畜化のみを取り上げ、まずはその関係を有用動物、使役動物、愛玩動物、複数の要素をもつ動物の4つに分類する。

1-1 有用動物

私たちが生きていく上で欠かせないウシやブタ、ニワトリといった肉や乳などを利用する食用動物や、毛や革といった身体の一部を利用する羊やミンクなどの動物が有用動物に位置づけされる。

1-2 愛玩動物

主に犬や猫、ハムスターなどの一般的なペットのことを指す。ガンターは、ほとんどの人がペットを飼う理由のひとつはコンパニオンシップ(親交)が得

られるからだと述べている[ガンター 2006:2]。人は愛玩動物を心理的な欲求を満たしてくれる大切な存在として、今では家族と同程度に扱われ、また受け入れられることで人間にとって最も身近にいる動物として位置づけられている。

1-3 使役動物

使役動物とは、人間の作業の補助のために使われる動物を指す。波多野は、主に人間が利用する動物の性質は、捕食者であることと、群れを作ることのふたつの要素のうち最低ひとつを持つと述べている[波多野 1997:12-14]。

ウマや荷物運びなどで使役されるウシやロバなどは「群れ」という点が当てはまる。群れで生活する動物は、コミュニケーションをとる能力に秀でおり、人はその動物たちの群れの一員として受け入れられ、比較的関わりを持ちやすい。

私たちにとって最も身近な動物であるイヌや水族館でショーをするイルカは群れで生活し、捕食者でもあり、ふたつの要素を満たしている。ふたつの要素を満たすということに対して波多野は、群れという社会のなかで上位のものに「従う」という本能があり、獲物を捕獲するための「学習」という知能も兼ね備えていることを意味すると述べている[波多野 1997:12-14]。このふたつの性質が備わっている動物であれば、人はその動物の行動をコントロールしやすいといえる。

では、捕食者というひとつの要素のみを持ち、人が能力を利用する動物をあげるとすると、それは家庭にいるネコや狩りに用いられる鷹があてはまる。まず、ネコを見てみると、ネコはイヌと飼い方から異なる。リードで繋ぐわけでもなく、芸を覚えさせて競うようなこともあまりない。ネコは飼われていても人に行動を制限されていない場合が多く、好きなきに外へ出て、気が向いたら帰ってくるという見方が一般的であり、「ネコはそういうものだ」と認知されている。狩りの本能も色濃く残っており、ネコを飼う家庭でスズメやネズミの死骸など狩りの収穫が目撃される話はよく聞く。

一方、鷹はどうだろうか。鷹は人が調教をしなければ人に寄り添ってくることはほぼない。鷹を飛ば

したときには、戻って来なくなるかもしれないという緊張が常にあり、発信機を付けるなどの対応をしておかなければならない。そのため、鷹はネコよりも人に対してある程度の距離を保ったままの状態関係構築をしていくこととなる場合が多い。

1-4 複数の要素をもつ動物

ここでは、上記の有用動物、愛玩動物、使役動物のうち要素を合わせ持つ動物を複数の要素をもつ動物として分類している。

例えば、使役したあとに食す(非常食である場合もある)など、有用と使役の要素をもつ動物として、ウシやウマなどがあげられる。また、使役と愛玩のふたつの要素を合わせ持つ動物として、イヌがあげられる。イヌは愛玩動物として多くの人に飼われており、また狩りをする猟犬や盲導犬など使役動物としても利用されている。

1-3 であげたように、使役動物として鷹は古くから利用されてきた。しかし、近年「ハリスホーク(和名:モモアカノスリ)」の普及がきっかけとなり、今までは狩りをする動物として認知され、用いられていた鷹が、ペットのような存在としても扱われ始めた。ハリスホークは、猛禽類の中でも「群れ」で生活する要素を持ち、人に慣れやすい特性をもつため、ペットとして飼育する人が増えてきているのだ。

かつては野生の鷹を捕獲し狩りに用いていたため、鷹は野生動物であるという認識が今以上に強かった。しかし、鷹がペットという位置づけで扱われ始めたことで、鷹に対する関係性の構築に変化が起きている。

第2章では、鷹の育て方の違いによる性格の差、鷹の種類に対する人々の認識の違い、人と鷹との関係性の違いを項目に分けて見ていく。

第2章 人と鷹の関係

そもそも鷹狩りとは、訓練したワシ、タカ、ハヤブサの仲間を使役して行う狩り全般を指し、鷹狩りが発明されてから約4000年、日本に伝わってからでも1600年以上の長い歴史がある。その鷹を扱う技術

のことをほうようじゅつ放鷹術と呼び、公家や将軍らに仕えて鷹狩

りに使う鷹を調教する職業のことを鷹匠という[波多野 1997]。かつて放鷹術には様々な流派が存在したが、現在活動している主な流派は「諏訪流」と「吉田流」のふたつである。

筆者はそのうちのひとつである「諏訪流」の鷹匠であるKの元で学び、この流派に属することとなった。諏訪流はもともと網掛あがけ(網で捕らえた野生の鷹を飼いならし、猟を行う方法)を使う流派である。諏訪大社の「にえたか贅鷹(鷹の捕らえた鳥を神前に供える神事)」が原点とされており、初代は織田信長に仕えた鷹匠小林家鷹である。以下からは放鷹術で使役するタカ類を「鷹」という略称で示す。

2-1 鷹に対する認識

筆者は、Kから鷹は野生動物であるため、たとえ人の飼育下で生まれた個体であっても、基本的な性格は野生のままであると言われてきた。実際、鷹は家畜化されたイヌとは異なり、最初から人に慣れていることはなく、他の野生動物と同様、人を警戒し、餌を見せただけで飛んでくることはない。このような状態から人と共に行動できるように慣らす反面、狩りを行えるように野生の本能を残したまま調教していかなければならない。

訓練では、鷹は人間を警戒しているということを前提で進めなければならない。鷹が人間に対して不快な思いを抱かないように行動することが重要である。したがって、犬のしつけのように大きな音で驚かせたり、叱ったりするなどの「罰」は利用できない。波多野は、鷹がそのように行動したくなるよう、人間が鷹の行動の先回りをしてお膳立てをしていく必要があると述べている[波多野 1997]。例えるならば、馬に水を飲ませたいならば、あらかじめ飼料に塩を混ぜ込み、馬が水を飲みたくなる状態を先回りしてつくるということである。その「どうやってお膳立てをするか」という部分に様々なノウハウや流派の違いが存在する。まずは鷹を飼育するうえで何を目的とし、どのような鷹を選択すべきかを考えてみる。

2-2 道具解説

鷹や放鷹術について記述する前に、まずは鷹を調

教するうえで筆者が使用した主な道具の名称と使用方法を説明する。

• えがけ (写真 1, 2)

いぶし鹿革製の手袋。手首から腕にかけて約 10 センチメートル隠れる長さ。利き手とは反対の手に付けて使用する。



写真 1. えがけ



写真 2. えがけ

• えごうし (写真 3, 4)

腰に付けて使用する餌入れ。小さく切った肉を入れておくもの。餌合子の蓋と容器を打ちつけて鳴らし、その音で鷹を呼ぶ時に使用する。



写真 3. 餌合子



写真 4. 餌合子の取り付け方

• まるばといれ (写真 5)

鳩を丸ごと入れることができるほどの大きさがある餌入れ。腹の正面に下げて使用する。



写真 5. 丸鳩入れ

• あしかわ (写真 6, 7)

カンガルー革製の鷹の足に付けておく紐。鷹が拳に止まっているときはこの紐を手を持つ。鷹が勝手に飛んでいったり、足で攻撃

されるのを防ぐためなど行動を制限するために使用する。



写真 6. 足革



写真 7. 足革を装着した状態

• ^{おおお}大緒(写真 8, 9)

鷹の足に付いている足革にくくりつけて使用する 50 センチメートルほどの紐。犬のリードのような役割を果たす。伝統的な形式のものと和様折衷型があり、現在使われているのは和様折衷型がほとんどである。



写真 8. 大緒



写真 9. 和洋折衷大緒

• ^{おきなわ}忍縄(写真 10)

絹製の 50 メートルほどの長さがある細い紐。鷹の足に装着して使用する長いリードのようなもの。ある程度離れた距離を飛べるようになったら大緒から忍縄に変える。ただし、木に止まるようになると枝に紐が絡まりやすいため、鷹が宙づり状態にならないよう注意が必要である。



写真 10. 忍縄

• ^{よぶこ}呼子または笛(写真 11)

金属またはプラスチック製の笛。鷹がルーアや生餌を捕ったときに鳴らし、笛の音と獲物を関連づけさせるために使用する。



写真 11. 呼子

- ・ パーチ (写真 12, 13, 14)

鳥を繋ぐための止まり木。数種類あるが、筆者は主にボウパーチ (写真 12, 13) とスクリーンパーチ (写真 14) を使用した。



写真 12. ボウパーチ



写真 13. ボウパーチ使用方法



写真 14. スクリーンパーチ

- ・ 輸送箱 (写真 15, 16)

鷹を運ぶ際に使用する箱。



写真 15. 輸送箱



写真 16. 輸送箱使用中

・ ルアー(写真 17)

狩りの訓練をするときに用いる擬似餌。羽根がついていなくても十分使用できるが、筆者は鷹に獲物を捕るとすぐに羽根を抜くという行動を教えるため、鳩の羽根を取り付けて使用していた。



写真 17. ルアー

・ フード(写真 18)

鷹の頭に被せ、目隠しをするために用いる帽子。



写真 18. フード

2-3 鷹を選択する

2-3-1 雌雄の差

一般的に狩りに用いられる鷹は3種おり、オオタカとハヤブサ、近年用いられるようになったハリスホークである。鷹の種類を決めた後は、雄と雌で性格が異なるため、その差を把握しておく必要がある。雌は雄よりも身体が1.5倍ほど大きく(写真19)、体重が2倍近くある。さらに雌は神経質な雄に比べて騒音などの音に対する耐性が強い。足も大きい(写真20)。そのため、鴨など比較的大きな獲物でも力で捕り抑えることができる。例えば、飼いネコ

や小型犬を見て鷹が「獲れる」と判断した場合は、誤って掴みに行ってしまう危険性があり、十分注意しなければならない。それに比べて雄は小柄なため、「獲れる」と判断する獲物が限られており、飼いネコや仔イヌ、子どもを襲う危険性は低い。その一方で、雄はスピードも速く小回りもきくが、神経質で扱い難いと言われている。



写真 19. 雌雄の大きさの違い



写真 20. 雌雄の足の大きさの違い

2-3-2 育て方による違い

・ ペアレントレード (網掛^{あがけ})

成鳥ではないが親から独立し、自分で狩りをして自活するようになったばかりの鷹を捕獲して調教する方法を網掛と呼ぶ。現在はワシントン条約により

日本での野生の鷹の捕獲は違法行為であるため、人の管理下で繁殖させ、生まれた個体をそのまま鷹に育てさせている。自活できるようになる生後2カ月ほどで親から離し、調教を始める。この比較的網掛に近い状態の鷹をペアレントレアドと呼ぶ。

本来の網掛は、野生下にある鷹を両親にもち、自然の中で生まれ育った鷹であるため、飛翔能力や狩りの能力は非常に優れていた。同時に、人間に対してかなり警戒心・恐怖心が強く、調教が困難であるとされており、中には人の手から餌を食べることを拒み続けて餓死した個体もいるという。

ペアレントレアドの利点は、鷹に育てられたため飛翔能力・狩りの技術が高いことである。また、人を噛むといった悪癖があったとしても、その行動を続けても意味がないことを理解すると、すぐに行動を修正できることである。そして、人に餌を要求する餌鳴きという行動をしないため、あまり鳴かないといった利点がある。欠点としては、野生に近いため人に慣れにくく、とても神経質であるという点などがあげられる。

・インプリント (巣鷹^{すだか})

まだ雛のうちに巣から降ろし、人の手で育てた鷹のことを指す。インプリントは、人によく慣れ、あまり神経質にならないことが最大の利点である。また、人の手で育てられていることから自分の能力の限界を把握しきれておらず、大きな獲物にも臆さず向かっていくことができる。そのため、大物を取りやすいのはインプリントであるが、獲物とそれ以外の区別をつけることが困難であり、獲物以外も襲いかねないので注意する必要がある。

人に対する依存度が高いため、よく餌鳴きをするといわれている。また、自分の兄弟に対して行う行動を人間に対して行うことがあり、攻撃的になる時期があるといわれている。そのうえ、インプリントは両親の飛ぶ姿を見て育っていないため飛翔能力が低い。

筆者が調教する鷹を選ぶ際、ペットのように人に慣れた存在として鷹を求めるのであればインプリント個体を、野生に近い「鷹らしさ」を求めたければペアレントレアドを選択するようにと、目的に合わせるようKに助言された。

2-4 鷹に求めるもの

代々伝統文化として鷹匠たちに狩りのために利用され続けてきたオオタカと、人に慣れやすいペットのような鷹として一般の人にも扱われ始めたハリスホークは大きく異なる。それぞれの鷹に対する人間の考え方や背s s型の違いについてみていこう。

2-4-1 オオタカ

オオタカ(写真 21)は放鷹術が行われ始めたときから使役され続け、鷹匠たちは代々オオタカを扱うことを伝統としている。

オオタカの大きさは中型で、林などの木々の隙間をすり抜けることを得意としており、狩りに用いることができる場所が多くある。しかし、オオタカはハリスホークに比べてとても神経質で調教が難しく、素人は扱わない方が良いとされている。動物園のバードショーですらオオタカを見かけることはあまりない。そのため、鷹匠たちは調教が困難とされるオオタカを意のままに飛ばし、狩りができることに誇りに感じている。

鷹匠たちは、オオタカを調教できてこそ一人前の鷹匠であると認識しており、また諏訪流ではオオタカでしか鷹匠認定試験を受けることができない。したがって、鷹匠たちのなかでは調教しやすいハリスホークを飛ばすことができて、「所詮ハリスホーク」といったようなイメージを抱かれやすく、鷹匠を志す者はみな「オオタカ」を所持し、調教することに憧れを抱いているように感じた。



写真 21. オオタカ

本来、放鷹術である諏訪流は野生のオオタカを捕

まえ、調教し、狩りを行うことを伝統としている。しかし、すでに述べたように現在では野生の鷹を捕獲することは法律上禁止されている。そのため、現在狩りに用いているオオタカは飼育下にある両親をもつ個体であり、伝統文化として受け継がれてきた「野生の鷹」を調教しているとは言えないという問題を抱えている。

最も困難とされる野生のオオタカを調教し、狩りができるということに鷹匠たちにとっての意味があるのである。代々、武将や天皇に仕えていた鷹匠たちと鷹との関係は、ペットのような単純な慣れ合いのみを求めているわけではない。いかに鷹の狩りの本能を残し、調教が困難とされる鷹をどれだけコントロールできるかに己の知識と経験の全てを捧げていた。剣道では竹刀を使う形で現在は成立しているが、本来は真剣勝負であるという心持が重要であるように、放鷹術でも現在は法律という壁があるため飼育下のオオタカを調教しているが、本来は野生の鷹を相手として向き合わなければならないという緊張感と困難さを常に意識しておかなければならない。

したがって、法によって規制された現在でも、鷹匠たちはより野生に近い状態の鷹を求め、狩りの技術を追求し続けているという現状がある。これが鷹匠たちが網掛を求める理由である。

2-4-2 ハリスホーク

ハリスホーク(写真 22)は、近年急速に飼われ始めた鷹で、群れで狩りを行うことができるという特徴をもつ。比較的に慣れやすく、他の個体と連係プレーを行うことができるため頭が良いとされている。騒音などにも強く、使える場所も多い。オオタカに比べて値段も安価なので、狩りに用いるというよりはペットのような感覚で一般の人に飼われることも多い。



写真 22. ハリスホーク

ハリスホークは、オオタカと比べると調教しやすい。そのため、鷹匠たちの間では将来オオタカで狩りをしたい人も、まずはハリスホークを満身に調教できてからといった位置づけとなっている。また、ハリスホークでの狩りはできないと考えられていたが、最近ハリスホークでも狩りを行うことができるということが判明したことで、「人に慣れやすく」、調教次第で「狩りもできる」というふたつの面を兼ね備えている。大勢の観客の前で飛ばさなければならない動物園のバードショーでも、ハリスホークは頻繁に用いられている。

2-5 人の鷹に対する考え方

2-5-1 狩りを重視する

筆者が世話になったKは、鷹匠であるとともに猛禽を専門に取り扱うペットショップを経営している。Kは日常的に、鷹の管理・調教を仕事として行っている。鷹を調教する季節になると、毎日のように同時に数羽の鷹の訓練を行い、人鷹共に技術の向上に努める。鷹の繁殖も行っており、Kが気に入った鷹や調教したいと思う鷹を手に入れると、今まで狩りを行っていた鷹の訓練を中断し、すぐに新しい鷹を調教できる環境にある。そのため、今までにKが調教してきた鷹の個体数は、筆者が出会った鷹に関係する人物の中で群を抜いて多い。また、Kは鷹で狩りをすることに力を入れており、多いときには一羽の鷹で猟期中(11月15日～2月15日)に100を超える獲物を捕獲している。そのため、Kに鷹の調教や狩りに関する技術の指南を仰ぐ者は協会の内外に関係なく存在している。

鷹狩りを行うということは、鷹の怪我や死亡事故という危険が伴うことも知っておかなければなら

い。筆者が聞いた話では、獲物から反撃されて片目を失った鷹や、野生動物に襲われて食べられた鷹、獲物である水鳥にそのまま引きずりこまれ溺死した鷹も多くいたそうだ。このリスクという面で狩りへの積極性に変化がでてくる。K は筆者に対して「もし、狩りをして水深が深い場所で鷹が溺れていても、自分が死ぬ危険性があるから行くな。鷹を見殺しにできる覚悟はあるか。」と何度も聞いた。実際に狩りをしている最中に鷹が溺れ、助けに飛び込んだ人が亡くなったという事故もあったという。以前、K の鷹が川幅の広い場所で溺れていたが、K は助けには行かず諦め、そのとき K と共に行動していた他の人が K の鷹を救出すべく川に飛び込んだそうだ。ここに鷹が危険にさらされる可能性もあることを承知の上で狩りをしているか、それとも鷹へのリスクを気にしながら狩りを行っているかという鷹に対する考え方や接し方に違いがある。

K は放鷹術としての所作や技術が高くなるよう鷹匠として鷹を調教する反面、ペットショップとしても猛禽を販売し、接している。そのため、K が関わる人物は鷹狩りをする人ばかりではないし、狩りをする鷹ばかりを相手にしているわけでもない。老人ホームのペットとしてベンガルワシミミズクを購入する人もいれば、息子が猛禽を飼いたいからと訪れる人もいる。そのため、K は来客者がどこまでやりたいか、目的は何かを聞いてから伝えるべきことや薦める鳥の種類を変えているという。よって、K は自分が調教する鷹には主に狩りを目的として接し、その他の猛禽にはペットショップの動物として接しているようである。

2-5-2 ペットとして接する

鷹をペットとして飼う人のなかには、小屋に鷹を繋いだままの人もいれば、独学で鷹を飼う方法を会得する人や、筆者のように協会に入って教えを受けて鷹を飛ばすに至った人もいる。しかし、「鷹を鷹として見る」人とそうでない人の決定的な違いは、「狩り」を行うかどうかである。

狩りを行うということは、鷹が自然界で生きていくために必ず必要になってくる、獲物に対する攻撃性や衝動を失わせないようにしなければならないということである。そのためには、定期的に生きた獲

物を鷹に獲らせなければならないし、その獲物は自分たちでさばかなければならない。鷹を人に慣れさせ、触り、ペットのように飼うことも可能ではある。しかし、狩りをする鷹を求めるのであれば、それなりの努力と時間が必要となる。鷹の「狩り」という衝動を人間がどのように受け止め、判断するかにより、人と共に生きる鷹は野生動物にもペットにもなりうるのだ。

鷹のペット化が浸透したことがきっかけとなり、趣味で鷹を飛ばしている人がメディアで「鷹匠」として扱われ、取り上げられることが増えてきている。そのような人々が、鷹で子どもやペットを怪我させたなどの事故を起こすと、本職である鷹匠達にも影響が及ぶという現状がある。フクロウなど鷹以外の猛禽を飼うことに対しても同様である。フクロウは鷹のように人と狩りを行うことはできないとされているが、人に育てられた個体であれば万が一逃げた時に餌を獲るための狩りができず、慣れている人間に対して襲いかかって食べ物を奪うという行動にでることも考えられる。事件や事故が増えれば、鷹を含む猛禽類は全て危険動物であると判断され、飼うことさえ法律で禁止される可能性がある。そうなれば、伝統文化として放鷹術を継承していくことができなくなってしまう。いくら人に慣れていても、猛禽は猛禽、鷹は鷹としての野生の気質が強いことを十分に理解し、配慮して飼育しなければならないのだ。

2-5-3 鷹として見る

K が多くの鷹と関わるのに対し、筆者が会った K 以外の鷹を調教している人は、一度に関わりをもつ鷹は平均 1~2 羽であり、その鷹との関係を一生持ち続ける場合が多い。これらの理由としては、野生の鷹を捕まえて調教していた時代と比べ、鷹を購入するために高額な費用が必要となることや、仕事や家庭もあり、そのうえで一度に複数羽を調教するとなると非常に困難であることが関係していると考えられる。聞き取りを行ったところ、鷹と人が共に行動できなくなった主な理由は、仕事による多忙や家庭をもつため、あるいは狩りの最中に鷹が負傷したり、死亡する事故が発生した場合などであった。それ以外は、一度関わりをもった鷹を手放すことはないよ

うであった。

鷹を購入し、調教することで、その一羽に対する思い入れや愛着は強くなる。しかし、鷹に愛情を注ぎ大切にしているからといって、危険を伴う狩りを避けているわけではない。筆者が所属する協会でも、鷹匠や会員に関係なく時間があれば狩りへ赴き獲物を捕獲している人もいる。たとえ狩りへ行くことはできなくても、鷹の体力が落ちないようにと毎日鷹を飛ばし、訓練している人がほとんどである。

狩りに用いる鷹は、ほとんどの鷹匠や鷹匠補はオオタカを使用している。一般の会員であればオオタカを所持している人はオオタカ、ハリスホークしか所持していない人はハリスホークを用いて狩りをしている。やはり狩りは鷹にとっても経験が積める貴重な機会である。そのため、狩りをさせることで本能を保ち続けたいという思いが強い。

もちろん、鷹を飼っていたり、調教している人であっても、リスクが高いという面で狩りに対してあまり積極的でない人も多くいる。そのような人達は鷹に対して、「鷹」という動物本来の姿を見ているというよりも、「その個体そのもの」を重視しているように見受けられる。

筆者は鷹を飼うことに対して、狩りというよりもショーのような動物とのコミュニケーションに興味を抱いていた。鷹を飼い始めたとき、筆者は狩りそのものにはあまり魅力を感じていなかった。しかし、実際に鷹が狩りをし、見事に獲物を捕獲する姿を見ることで、狩りをする能力に魅せられた。そして、鷹には鷹本来の生き方を経験させ、あるべき姿を残した状態にしてあげたいという気持ちを抱くようになっていった。

次章では、筆者が実際に鷹を飼うなかで見た鷹の行動の変化を、筆者が感じた「鷹の感情」として分類し分析していく。人は動物をどのように理解し、どのような関係を構築し、動物に何を求めているのかを、筆者と鷹の関係を通してみていくことにしよう。

第3章 事例 -鷹の行動の変化-

筆者は、諏訪流放鷹術鷹匠であるK家に2012年8月17日～9月21日にかけて世話になった。約1カ

月間、住み込みで働きながらKから放鷹術を学び、現在に至るまでの2年間を鷹とともに過ごしてきた。この2年間の間に、鷹の行動に多くの変化が見られた。この章では、特に鷹の行動に著しい変化が見られた2012年8月～12月、2013年8月～12月にかけての記録を、筆者が鷹の行動から判断し、「鷹を理解するうえで必要となった鷹の感情」として分類している。

分類した項目は「攻撃」、「警戒／威嚇」、「逃避」、「安心」、「興奮」、「要求」、「葛藤／迷い」、「疲労」、「遊び」の9項目である。これらの行動のうち、時間が経過するにつれてどのように変化していったのかを表すことにより、攻撃行動から次第に加減をした要求行動へと変化し、身体を触らせるまでに至った「慣れへのプロセス」をまずは述べていく。そして、獲物を捕獲し、自ら学んで本来の野生の鷹に近い行動をするようになった「狩りへのプロセス」をみていくことにしよう。

以下からは筆者が調教を担当した2羽のうちペアレントレアド個体をP個体(写真23)、インプリント個体をI個体(写真24)と表示する。

ただし、P個体とI個体を同時に調教したのは2012年8月～9月にかけての1カ月のみであるため、2012年10月以降はP個体のみでのデータである。なお、筆者が担当したP個体、I個体は同じ両親を持つ兄弟である(P個体・兄、I個体・弟)。



写真 23. P 個体



写真 24. I 個体



写真 25. 瞳孔小

3-1 攻撃

この項目では、鷹の攻撃行動の変化を見ることで攻撃にも段階が存在すること、そしてその攻撃行動の変化を見て筆者が鷹に親近感を抱いたきっかけを見ていく。

1 年目

鷹を調教する上で最初に行うことは、餌を抜いて腹を空かせておくことである。空腹状態の鷹に人の手から餌を与え、食べさせることで徐々に人に慣らせていく。筆者が最初に担当したP個体はすでに餌を抜く過程を終えていたため、筆者は餌やりの訓練から始めた。まず、鷹の餌やりを任せられたのだが、餌を持って近づくとこちらに飛んできて餌を奪い、小屋の隅へ移動してすぐさま筆者に背を向けて大きな声で威嚇してきた。鷹は瞳孔が小さくなっており(写真 25)、羽根を広げて奪った肉を取られないように隠す行動をとった。威嚇しながら時折こちらを見ては様子をうかがう仕草もあったが、筆者がいなくなるまで餌を食べ始めることはなかった。餌を奪われては訓練にならないため餌をとり返し、もう一度餌を持って近づくことになった。

鷹にとっては初めて人の手から餌をもらうことと、先ほど筆者から餌を奪われたという記憶が鮮明だったということもあり、筆者が近づくと足で筆者の手に掴みかかった。前日にKから訓練行程を終えて人慣れした鷹を腕に止まらせてもらったが、鞆を握るというよりも木に止まっているような「拳に乗っている」状態だったため、痛みは全くなかった。

しかし、今日初めて担当した鷹は大きな声で鳴いて威嚇し、非常に警戒心が高まった状態になっていたため、昨日の鷹よりも強い力で筆者の腕を掴んできた。鷹を拳に乗せるには鷹の足についている足革を左手で持たなければならないのだが、筆者が右手を動かした際、鷹に右手を掴まれてしまった。鷹にとって足は獲物を取り押さえるための最大の武器であるため、一度掴まれると外すことは困難である。そのため、鷹が自ら足を放すまで待つか、傷口が広がること覚悟で無理やり外すかの2択である。結局いつまで待っても血が流れるだけで一向に足を放してくれる気配がなかったため、無理やり外した(12.8.18)。

翌日、鷹は羽根が身体に貼りつきすらった状態状態で、瞳孔も小さく、いつでも飛び立てる状態はこちらを注意深く見つめていた。昨日ほど鳴いて威嚇することはなかったが、筆者と鷹との距離が1メートルほどまでになると、鷹は部屋の隅へ移動し、筆者に背中を向ける姿勢をとった。小さく切った餌を投げるとこちらまで来て餌を奪い、また部屋の隅へ

移動した。次に大きめの餌を見せると餌と鞆の両方を掴み、部屋の隅へ持っていきこうと筆者とは反対方向にもがきながら飛ぶ行動が見られた。その際、鷹の足に付いている紐を持つとと筆者が右手を動かしたと同時に鷹に右手の指をつかまれてしまい、筆者も P 個体同様身動きがとれない状態になった(12. 8. 19)。

I 個体が筆者の腕に直接乗ったが、爪が伸びきっている状態であるにもかかわらず全く痛くなかった。筆者の腕を止まる「場所」として考え、無駄な力を入れずに比較的緊張を解いた状態であるように感じた(13. 8. 25)。

以前までは身体を触ろうと手を動かすだけで P 個体に攻撃されていたが、訓練が進むにつれて少しは身体を触らせる状態になった。P 個体は肉色(胸の辺りにある竜骨突起についている肉の膨らみ具合。この膨らみ具合を触ることでだいたいの鷹の体重を把握する)を手で触って確認するとき手を噛んだりもしないが、I 個体はすぐに噛んできた。P 個体は、前日に餌合子で餌を食べることを教えたばかりだったので、もう一度大緒に繋いだ状態のまま餌合子で呼んでみたが、なかなか拳に乗り移ってくれなかった。その際、P 個体が握りしめていた自分の足を筆者が手で開こうとした時、P 個体に右手の指を掴まれてしまった(12. 9. 1)。

P 個体の体重を測る際、鷹が拳から離れたとたんに親指をつかまれた。足革をしっかり持っていないと、まだ筆者の手の動きに対して警戒している為か攻撃されてしまう。P 個体が足を出しやすいという特徴をもつ個体だからだと言われた。しかし、筆者が不慣れなため、P 個体が攻撃にうつりやすい動きをしているという点にも原因があると鷹匠の O に言われた(12. 9. 3)。

P 個体の訓練時、いきなり足革を持つときに攻撃される。I 個体のように呼ばなくてもすぐに来ることはないので 10 メートル離れて呼んだ。P 個体がパチから飛び立ちこちらに来たが、筆者の顔目がけて飛んできているように感じたため、恐怖から咄嗟に水平にしていた腕を真上に上げてしまい、P 個体が頭に止まった。筆者は P 個体のこの行動に対して「攻撃された」と感じたが、K は筆者の腕が安定し

ておらず、腕よりも頭の方が止まりやすく見えたからではないかと言っていた。ガッシリと強く握られれば攻撃だが、そうではないのであれば鷹は攻撃をしているつもりではないそうだ(12. 9. 4)。

I 個体の訓練では、噛みクセを直そうと筆者の手をずっと噛ませ続けてみたがなかなかやめない。P 個体も最初は噛んでいたが、噛ませ続けるとすぐにやめて右手の動きを無視するようになった。このとき、ペアレントレアドの方がインプリントよりもより野生的で適応性が高いため、無駄だと判断した行動はすぐにやめることができるが、インプリントはそうではないという行動のしつこさの差がなんとなく分かった気がした(12. 9. 11)。

P 個体にフードをつけた(写真 26)。フードを顔に近づけると頭を後ろに引いて避ける。かぶらせてもすぐに後頭部にある紐を絞らなければ、頭を振ってフードを落とされてしまう。鷹が嫌がるからといってフードをつけることを諦めると、鷹に抵抗し続けたらフードを付けなくても良いと思われてしまうため、一度始めたらフードをかぶせるまで何度も繰り返す。P 個体はフードをつけていても外界の微妙な気配を察知し、鞆をしていても素手に爪跡が残るくらい強く握りしめてくる。フードをかぶった P 個体の目の前で少し手を動かすだけでも気配を感じ取り、足で掴みかかってくるという危険行為を繰り返していた。フードを被っているため外の様子は見えていないはずなのに悩んでいたが、K の妻である Y と観察を続けたところ、フードの隙間から差し込む微弱の光を遮る手の影に反応していたということが分かった。このことから、フードをかぶらず視界が開けているときは筆者がどのような行動をしているかが見え、状況を把握することができるので同じ動きをしても攻撃することはなかったが、中途半端に視界が遮断されていると、光を遮る動く何かに不安を抱き、攻撃性が増すようであった。しかし、I 個体は P 個体同様フードがピッタリと頭部の形に合っておらず、隙間から見えているだろうという状態でも攻撃してくることはなかった。そのため、同じ状況下でも個体によって行動が異なってくるということが判明した(12. 9. 16)。



写真 26. フードを被せる

P 個体が自分の足で足革を踏んでいたのので、筆者が手で足革を引っ張って取ろうとすると、その指を掴んできた。Y が言うには、足の下を擦ると鷹は気持ち悪いらしいので、それが嫌で指を掴んだのではないかという。ただ、初対面の日のように足で筆者の手を握りしめて放さないという掴み方ではなく、軽く筆者の指を掴んですぐに放してくれた。これを見て筆者は、足を出して掴むという行動の全てが単に「攻撃」を意味するのではなく、同じ行動でも力加減をして掴んできたため、筆者の行動が嫌だったという P 個体の「意思表示」だったのではないかと思うようになった(12. 10. 3)。

以上のように、鷹は視界が開け、視覚で状況を把握することができるときは攻撃してくることはないが、フードなどで視界が中途半端に遮られている場合には不安を抱きやすく、攻撃性が増すようであった。しかし、I 個体と P 個体は同様の状況であったにもかかわらず反応が異なっていたため、同じ状況下でも個体ごとに行動が異なることが判明した。また、鷹との関係を築き始めて約 2 カ月後には、足を出して掴む攻撃に加減が見え始めた。鷹にも力加減が可能であり、時間が経過するにつれて攻撃性が減少していくのを目の当たりにしたときから、筆者は P 個体の行動に対しての不安が減少し、P 個体を信用し始めるきっかけとなった。これにより、今までの攻撃は単に拒否されたのではなく、P 個体の「意思表示」という意味ある行動であったと思えるようになっていった。そして、「身体を触らせる」という筆者の行動に対して鷹の慣れが見え始めてからは、鷹に対して愛着を抱くようになった。



写真 27. 入り口まで来る

2 年目

小屋の扉を開けると P 個体がこちらへ寄って来たが、すぐに慣れさせるため、餌をやりながら P 個体の頭を人差し指で円を描くように触っていると、「アー！」と鳴いて威嚇され、鷹をパーチに戻して右手で持っていた大緒を手から離して P 個体の足が自由になった途端、P 個体に手を掴まれた(13. 9. 1)。

かなり空腹だったのか小屋に近づいた時にはすでにパーチから離れて扉の目の前にいた(写真 27)。指を掴まれたとき、以前はただ「攻撃された」と思うだけであったが、今では精神的に余裕が出てきたのと P 個体に愛着が湧いてきたためか、「餌がほしかったのなら仕方ない」と思うようになっていた(13. 9. 30)。

P 個体をスクリーンパーチに繫いだ後、鷹の足元にある紐を素手で解いていたら 2~3 回素早く掴まれた(13. 10. 6)。



写真 28. 肩に止まる

その日は2時間程度室内で据えて訓練を終了。この日からP個体は筆者の腕をよじ登り、肩にとまわってくるぐなどの行為(写真 28)が見られるようになった。胸の部分に触ると無視するが、あまり触り過ぎると軽く嘴で挟んでくるが、全く痛くはなかった。このP個体の行動を見て筆者は、嫌ならはつきり噛めばいいのにそれをしないのは、「相手を気遣う」もしくは「傷つける相手ではない」と判断してくれたのではないかと感じた。その後、何回触っても軽く挟むだけで本気で噛んでくることはなかった(13.10.8)。

2年目は1年目と比べて明らかに攻撃回数が減り、2年目になると鷹が嫌がる行動や物などを先に把握できるようになったということもあるが、攻撃と言っても出会った当初のような“強く握る”という行動は一度も見られなかった。そのため、以前は鷹に掴まれると単に「攻撃行動」としか思えなかったのに対して、2年目では「攻撃」の要因に目を向け、「鷹が攻撃する意図」を考え、攻撃に意味づけするようになった。さらに、足や嘴での攻撃に関しては明らかに力加減をするようになったため、筆者は鷹に「傷つける相手ではない」と判断され、去年よりも親密な関係を築くことができたのではないかと感じた。

まとめ

以上のことから、鷹の攻撃には「段階」が存在し、足の力の入れ加減や、すぐに足を放すかそうでないかで行動に変化を持たせ、意思表示できることが判明した。また、この攻撃の加減に関しては、初めて

出会った人間かそうでないか、鷹にとって不快な行動をしているかそうでないかによって攻撃の度合いが変わってくるということが分かった。したがって、筆者に対しての攻撃頻度が少なくなったのは、付き合いの長さというよりも、付き合いが長くなるにつれて鷹が不快に感じる行動を前もって察知しやすくなり、慣れによって鷹が許容できる行動の幅が広がったため、鷹の行動が徐々に痛みを伴わない行動へと変化していったのではないかと考えられる。同時に、鷹に「近づく」、「触る」といった接触が徐々に可能となり、鷹の攻撃頻度の減少・接触受容というふたつの要素が重なった。これにより、筆者は「自分は他の人よりもこの個体に受け入れられ、少しは信頼を得ることができたのではないか」と思えるようになった。このように、自分はこの個体の特別な存在になれたという認識によって、鷹に対しての愛着が湧き始めたきっかけになったのではないかと考える。

3-2 警戒／威嚇

ここでは、鷹にあらゆる対象や状況に慣れさせるプロセスを見ていくとともに、鷹にも対象を比較し、選択する能力が備わっているのではないかという点を見ていきたい。筆者の鷹に対する考え方に関しては、鷹の行動や身体変化を鷹の「感情」として捉えるようになることで、ペットとしてみるような感覚が根付き始めていることに注目する。

1年目

P個体の訓練では、筆者の姿を見るとすぐに低い声で鳴いて威嚇し、背を向けた。なんとか拳に乗せることはできてもこちらをじっと見つめ、警戒して餌を食べない状態であった(12.8.20)。

P個体を人の拳に乗る状態に慣れさせる為、餌を食べ終わった後も微動だにせず据え続けてみたところ、尾羽は開いたままだが威嚇して広げていた翼がだんだんと閉じていった。鳴くことはしなくなったが、筆者が手を少しでも動かすと警戒して翼を大きく広げた(12.8.22)。

餌がなくてもP個体は筆者の拳に乗るようになったが、紐を外す、立ちあがる、歩くといった行動をする度に周りを見渡し、目の前にある餌には見向き

もしなかった(12.8.24)。

いつも使用しているものとは異なる鞆に変えて訓練を行った。すると、P 個体、I 個体共に拳に乗って来ることはなかった。元の鞆に戻すと I 個体は乗ったため、普段使用している鞆の色や肌触りなどが変化するだけで違和感を覚え、抵抗するということが分かった(12.8.26)。

I 個体は餌を食べさせながら繋いでいた場所から 5 メートルほど離れた入り口まで来ることはできたが、口をあけた状態で息が荒く、餌の半分を食べただけで周囲を見回して餌に見向きもしなくなった(12.8.27)。

I 個体を拳に据えた状態で小屋の周り(約 50 メートル)を歩いても驚かなくなり、外に置いてあるパチに乗せて餌を見せて呼ぶと飛んできた。しかし、餌合子の中の餌(ウズラの肉を小さく切ったもの)を見せても来なかった。もう一度餌を見せると来る。そして再び餌合子の中の餌を見せると飛んできた。このときに初めて餌合子の中にある「小さな何か」が「餌」であると理解したのだと考えられる。餌合子の餌を食べさせながら蓋で器を叩いて音を鳴らすと、食べるのをやめて周囲を見渡し始めた。音出しを中断して待つとまた食べ始めたため、今度はより小さく音を鳴らして音と餌を関連付けて覚えさせた。次は地面に置いてあったパチに I 個体を止めて上下の動きで呼んでみた。1 回目は来たが 2 回目は上下運動をしてまで餌を欲しいと思わなかったのか、来ることはなかった。かなり体重が低かったため、このときの餌の量で満腹になることはない。人に慣れているはずの I 個体ですら餌を見せても来なかったため、そこまでして欲しくはないということだったのだろうか判断した。さらに、鞆に爪のあとが残る程強く握りしめていた P 個体に対して、I 個体は鞆で隠れていない腕の部分に止まったとしても、腕が安定していたためか全く痛くなかった。やはり鷹が警戒して不安になっていたり、筆者の腕が安定していない時に力を入れて掴んでくるようであった。この時期から、筆者の拳を握る鷹の足の力の入れ加減は鷹の心理状態を意味するものではないかと思いはじめた(12.8.29)。

P 個体のルアー仕込みを行う。昨日はパチに止まらせてからルアーを投げても反応しなかったので、

拳に止まらせた状態で目の前にルアーを落として近づける。するとルアーの上に飛び降りて掴んだ。すぐに周囲を見渡し警戒している素振りを見せたため、驚かせないように笛を弱く吹き、食べ始めたら強く吹いてルアーと笛の音を覚えさせた(12.9.1)。

ルアー仕込みの時、P 個体はルアーを掴んだまま翼を広げて足元にあるルアーを隠し、餌を食べることなく周囲を見渡ししながら鳴きはじめるという行為が見られた。K がいうには、どうしたらいいか分からなくなったときに相手に頼ってしまうという親のプリント部分が出てしまい、筆者を親だと思って甘えているかもしれないとのこと。「ピーパーピーパー」という高い声だったら甘えや餌などの要求だが、低い声なら威嚇という判断になるそうだ。P 個体はルアーを掴むと周りを気にして餌を食べず、ルアーを掴んで持ち逃げしようとする。この行動が本来の鷹の本能であり、捕った獲物は他の鷹や動物などに獲られないよう、藪や茂みなどの場所まで引きずっていった後隠れて食べ始める。鷹と狩りを行うためには、まず「獲物の持ち逃げ」という行動を「その場で食べる」という行動に教えなおさなければならない。また、偶然かもしれないが I 個体にはこの「持ち逃げ」という行為が見られなかった。これは親の餌を食べる姿を見たことがなく、兄弟同士で餌の奪い合いなどをして、餌を取られまいとする行動をしたことがないからではないかと考えられる。そうなれば、獲物の持ち逃げは「本能」ではなく、「学習」ということになる(12.9.6)。

P 個体にルアーを投げて掴ませると周囲を見渡ししながら鳴く。小さく切った餌を目の前に投げて食欲を誘発させ、その場で食べ始めるように誘導しても全く餌に気づかない状態であった。ルアーを掴んだのはいいものの、ルアーに付いている餌に気づかずどうしていいかわからないのだろうかと思ったため、手でルアーをひっくり返し、下敷きになっていた餌を見せると食べ始めた。この行為が数日間続いた(12.9.8)。

普段訓練で利用している公園とは異なる場所での訓練では、周囲を見渡し警戒し、餌を見せても P 個体の注意を引くことができなかった。鷹を呼ぶ方法は餌であるため、その餌にさえ興味を示さない場合、万が一鷹が嫌がる何かに遭遇したときに呼び戻

すことができなくなってしまう。そのため、このように周囲を警戒するなど、不安要素がある場所ではあまり飛ばさないようにしている (12.9.24)。

大学内にあるA-101教室(生徒が500人入れる学内で一番大きな教室。一番低い場所にステージがあり、そこを中心としてコンサートホールのように上に向かって段状に椅子が設置されている)にて、生徒約400人がいる前でP個体を飛ばした。教室には止まる場所が少なく、天井近くで旋回し、ステージ上のライトに止まった。P個体から見やすい場所まで移動し餌合子で呼ぶが、下から400人程の生徒の視線を一気に浴びているため、呼んでもすぐに下りてくることはなかった。階段を上がり、高い場所まで移動すると飛んで戻ってきた。生徒がいなくなった状態で同じ教室内で飛ばすと、先ほどとは異なりすぐに飛んで戻ってきた。P個体がこの場所に慣れたのか、もしくは人がいなくなったからか、または両方が要因と考えられる。

数時間後に大学の敷地内にある広場で約100名の生徒の前でも飛ばした。筆者には大勢の人がいる場所を嫌っていたように見えたため、人がいる方とは逆方向に飛ばした。しかし、P個体はUターンして人が集まっている木の上に止まった。1,2回目は躊躇してなかなか木から下りてこなかったが、3回目になると呼べばすぐに戻ってくるようになった(12.10.15)。

1年目では筆者が少しでも動く翼を広げ、大きな声で鳴いて威嚇をしたり、すぐに攻撃や逃避行動ができるよう常に筆者の顔や動きを観察し、状況の把握に努めているように感じられた。しかし、毎日顔を見合わせて「筆者の存在」に慣れさせることで威嚇行動は次第に減少していった。そして鞆の例のように、通常とは異なる見た目や感触などを敏感に感じとり、その変化に執着しやすいということが分かった。また、鷹が警戒している様子をすぐに察知できるようになることで、その原因が何なのかを見つけ、鷹が不快感を覚える前に不安要素を排除して鷹が訓練や筆者に集中できる環境を作ることが、鷹が信頼して緊張を緩めるうえで重要であることがわかった。そして、普段からその不安要素をひとつずつなくしていき、鷹にとってよりプレッシャーが多

い環境で飛ばすことができるようになればなるほど、人の鷹に対する信頼は強くなっていくのである。

2年目

餌を見せると拳に乗るが、餌を持たずに拳を差し出すと乗ってくることはない。訓練前に見せても乗ることはなかった体重計に、訓練が始まってから見せると何の躊躇もなく乗った。拳に乗るという行動が引き金となって体重計に乗るという行動も思い出したのではないかと感じられた(13.8.23)。

雨が降っている時に外へ出ると、身体に雨粒が当たったと同時に翼を大きく広げて体勢を低くし、周りを見回して瞳孔が少し小さくなった。しかし、餌を見せると雨にうたれながらも食べ始めた(13.8.24)。

大緒を付けた状態のまま外で渡りを行うと反応が良かったので、そのまま訓練を餌合子で行った。餌合子を腰から取り出すとP個体はその容器をじっと見つめ、蓋を開け、中に入っている肉を確認するとすぐにこちらへ来た。餌合子の器に蓋を当ててカチカチと音を鳴らしても驚かない。去年の段階では餌合子の餌を見せてもなかなか来なかったうえ、体重は今より100gも低かったため空腹状態であったにも関わらず、音を鳴らすとすぐに周囲を見渡して警戒し、餌を食べなかった。まずは見て肉を確認するという行為は去年と同じだが、「音」に関しては覚えている(もしくは気にならない程度までになっていた)ようだった。「初めて」と「4カ月見てなかった」の違いはかなり大きく、去年とは全く違う鳥のように感じた。餌合子の中のものをすぐに肉と判断したという点でも、肉がどのような状態で与えられるのかを把握できていなかった去年とは異なっていた(13.8.29)。

初めて一人で爪嘴つめはし(伸びきった爪や嘴を削って短くすることで爪の攻撃性を落とし、嘴で沢山餌を食べることができない状態にする)を行った。右手で背後から鷹の両足を掴むと瞳孔は小さくなり、鳴いて威嚇しながら翼を大きく羽ばたかせた。すぐに布で目隠しをして翼をたたんで固定する。爪を切っていると、突如大人しくしていた状態からいきなり足を動かしてもがきだした。嫌がっているときにやめる

と今後暴れ続けると思ったため、無視して爪を切ると爪の先から血が出てきた。嫌がっていただけなのか、本当に痛がっていたのかという区別がつかなかった(13. 9. 13)。

P 個体が木に止まっていると、去年は近寄ってきたカラスに対して無視か筆者の方に飛んできていたが、今日は1対1だということもあってか、カラスを追い払おうと翼を広げ、カラスに足を向けて威嚇する姿を見ることができた(13. 9. 17)。

去年と同様の手順で傘仕込み(ジャンプ傘を用いて傘の存在といきなり広がる傘の動きに慣れさせる)を行った。今回も開いた瞬間に最初はビクッと身体を震わせて驚いていたが、4~5回繰り返すと何の反応もなく、傘の動きを無視するようになった。数日後に餌なしで傘を開いて見せたが驚くことはなかった(13. 9. 29)。

TV取材を受けた日。TV局が使う大型のカメラがP個体の正面から1メートル程の距離まで近づいても驚いて飛び立つことはなかったが、カメラがP個体の後ろに回ると身体を震わせ、翼を羽ばたかせる行動が見受けられた。この行動から「背後に何かがあることは不快」であったと判断した。撮影に使えたらとTV局がラジコンヘリを持ってきた。音と動きに慣らせるため、餌を食べさせながらラジコンヘリの動きとモーター音を聞かせた。ラジコンヘリは去年の冬にもP個体に見せたことはあったが、プロペラの音が鳴り出した途端に翼を広げて体制を低くし、瞳孔は小さく嘴もうっすらと開け、餌を見せても食べない状態になった。木へ飛ばしてみると、空中で浮遊しているラジコンヘリからかなり離れた木に止まり、餌を持っている筆者ではなくラジコンヘリを見て警戒していた。しかし、驚いて逃げることもなく、餌合子の音を鳴らせばラジコンヘリとある程度の距離を保ったまま飛んで来るため、警戒はしているが逃避にまでならなかったため安堵した。ヘリのモーター音が止んで動きが止まると、先ほどまで薄く開けていた嘴を閉じた。そのため、P個体はラジコンヘリの動きと音が「不快」であったと判断した。以前、Kから気温が高い時や疲労しているとき以外に、嫌がっているときでも口を薄く開けるということを知っていたが見たことはなかったため、このとき初めて嘴を薄く開ける行動は鷹が嫌がっているサ

インでもあることを理解した(13. 10. 10)。

P個体に筆者以外の人に触ることに慣れてもらうため、餌を食べさせながら筆者の妹に筆者の向かい側からP個体の翼を触ってもらった。以前は体重が現在よりも50g程軽かったため、触られても餌に夢中で気にしないか、餌なしだと身体を後ろに引いて手を避ける、もしくは飛んで逃げようとするという行動パターンであった。今回は餌を食べているときに翼を触ろうと妹が手を伸ばすと、翼に触れる前に食事を中断して妹を見つめた。P個体が食べ始めたのを確認して再度触ろうとすると、餌を食べながら妹側の羽根だけを下に垂らし、翼で餌を隠しながら食べるという行動がみられた。筆者側の翼は閉じたままであったため、こちらから餌を取ろうと思えば取れる状態である。それでも筆者には餌を隠さず、妹に対してのみ餌を隠すという行為をしたのは、筆者よりも妹の方がP個体にとって餌を奪われる可能性が高いと判断したためではないかと感じられた。餌がなくても筆者には身体を触ることを許容し、餌があっても他人が触ることは拒絶するという状態である。しかし、P個体から餌を奪うという行動を筆者は何度も行っていたため、今まで餌を取られたことがあるがいつもいる人と、何をするか分からない初めての人とを比較したうえで許容できる方を選択したのではないかと考えられる(13. 10. 13)。

友人ふたりを連れて普段から訓練に使用している公園へ行き、訓練風景を見せた。その際、鷹が拳に戻ってくる姿を間近でみせようと拳から1メートル程離れた場所に友人を立たせ、飛んでくる鷹と向き合うような形をとった。すると、鷹が拳に止まったと同時に友人が驚いて大きな声を出してしまったため、P個体の足に一瞬力が入り、周囲を見渡して原因を捜していた。次に筆者以外の人拳に止まることに慣れさせるため、友人の腕にグローブを付け、その手の上に肉を乗せて近くで餌合子を鳴らした。すると、通常通り飛んできたのだが、友人の手の上にある肉には見向きもせず餌を持っていない筆者の腕に無理やり止まった。これは餌の存在に気付いていないのか、この人が嫌なのか、普段とは違うグローブが嫌だったのかは分からない。今度はP個体が友人の拳に乗るギリギリまで餌合子で音を慣らし続けてみると、友人のグローブに止まって餌を食べ

た。しかし、餌を食べ終わると呼んでいないのに筆者のほうへ飛んで来たため、先ほど提示したすべての要因が考えられる結果となった。その後、他人の拳に止まる練習を 2~3 回繰り返すことで次第に餌を食べた後でも友人の拳の上に止まった状態が長くなり、最終的には餌を食べた後も筆者から拳を差し出すまで他人の拳の上で待つことができるようになった。したがって、これまでの事例から P 個体は、最初は驚いていた行動や状況に対しても餌を食べさせて注意をそらしながらであれば、その行為を立てつづけに 2~4 回繰り返すことで状況を把握し、受け入れることができるということが分かった (13. 10. 20)。

2 年目になると初期の頃よりも短い期間で拳に乗ったため、警戒はするがあまり威嚇行動は見受けられなかった。訓練前には乗ることがなかった体重計に、訓練が始まってからは見せただけで何の躊躇もなく乗る行動がみられた。鷹にも“思い出す”という記憶の蓄積や活用ができるのではないかと考えられた。また、餌合子の慣れに関しても、今年は去年よりも体重が 100 g も重く空腹度が低かったにもかかわらず、2 年目ではすぐに餌合子内の肉を音も気にせず食べはじめたため、「初めて」と「4 カ月見てなかった」との間に“慣れ”に関する違いがあることがうかがえた。さらに、妹に P 個体を触らせた事例では、筆者と妹を比較し、どちらがより警戒すべき対象であるかを判断したうえで行動するという鷹の思考と判断できる行動を見ることができた。

まとめ

これまでの事例から、腹を空かせ、餌に注意を逸らせながら鷹が不快に感じる行為を何度も繰り返すことで、鷹に“害のないもの”だと理解させ、慣れさせることができることが分かった。このような行為を続けていくことで、どのような状況でも訓練や狩りができる鷹になっていくのである。妹から餌を隠すという行動からは、ふたつの対象を比較した上で許容できる方を選択したのではないかと思われる行動が見受けられ、鷹にも取舍選択という概念があるのではないかと感じられた。

また、同様の例からは今まで餌を奪われたことが

あるが“いつもいる人”と、餌を奪われた事はないが“何をするか分からない人”とを比較したとき、鷹が今まで培ってきた経験や記憶よりも、鷹自身が行動を把握できていない人を警戒するのではないかという様子見られた。このとき、鷹にとって許容できる側に属することが信頼を得ていると言えるのではないかと思えた。さらに、筆者にとって、去年まで理解不能だった P 個体の行動や身体変化を P 個体の「感情」として捉えるようになることで、鷹ではあるが「P 個体」という個性ある個別の存在としてみるようになった。

3-3 逃避

この項目では鷹の記憶に関して見ていくことで、一度覚えた不快な出来事に対して、前もって予想することで逃避という対処をしているのではないかという点を見ていく。そして、鷹の筆者に対する逃避行動の変化について、筆者はどう受け取ったのかを考えていきたい。

1 年目

I 個体を体重計に乗せて体重を測ることもできるようになったうえ、餌を食べさせながら網戸の開閉する音を聞かせても平気であった。外へ出ると周囲を見渡して警戒していたため、注意を引こうと餌を見せると食べ始めた。そこへ K の長男が来たため、初めて見る人物に I 個体が驚き、飛び回って暴れ始めたので急いで小屋の中へと戻った。その後、I 個体をブースに連れて戻ったが、地面に伏せ、餌を見せても反応しなくなってしまった。P 個体は餌を見せなくても拳に乗ってきた昨日とは異なり、餌を見せない拳に乗ってきてはくれなかった。恐らく体重が重くなっていたため、自分から積極的に拳に乗ってまで餌は必要なかったと判断したのだと思われる。拳に乗せ、少し歩いては立ち止まるという行程を繰り返し、暴れないよう餌を食べさせながら 3~4 メートル離れた付近まで移動することができた。するとゲージに入った鶏(写真 29)が鳴きだし、それに驚いた P 個体が飛び回って暴れ始めた。鶏を狙ったのか、鶏の鳴き声に驚いたのかは分からなかったが、飛び回った後は疲れて紐から力なくぶら下がって硬直した状態になってしまった、拳に乗れるような状

態ではなくなった。仕方なく地面に P 個体を降ろすと、瞳孔は小さく嘴を薄く開け、翼を広げた状態で地面に伏せて周囲を見回していた。さらにそこへトラックが来たため、これ以上驚かせて訓練に支障をきたしてはいけないと判断し、無理やり P 個体を拳に乗せてトラックを筆者の背で隠し、鷹から見えない状態にしてトラックがいなくなるのを待った。翼を閉じて P 個体が落ち着いた状態になるまで待つ。警戒して広げていた翼は閉じたが、周囲を見回して警戒していたため、餌を見せても反応はなかった (12. 8. 25)。



写真 29. 鶏のゲージ及び鷹のブース

P 個体の訓練時、今日も小屋から出ようと拳に乗せて歩くが、鶏のゲージ前でゲージとは反対方向に飛んで逃げる。鶏のゲージに行くギリギリまでは餌を食べているのだが、手前まで行くと鶏が鳴いていなくても暴れるため、P 個体のトラウマになってしまったのだろうかと不安になった。地面に伏せた P 個体をその場で拳に戻し、前回と同様に興奮して広げていた翼と開いていた嘴がだんだん閉じて落ち着くまで待つ。餌を見せると少し食べ始めたため、再度チャレンジしようと鶏ゲージの方に向き直るとすぐに先ほどと同じ反応で驚かせてしまった。一度落ち着いたとしても、同じ場所まで行くとまた同様の反応をして驚いてしまうことが分かった (12. 8. 28)。

P 個体の体重を測る (写真 30) ことができた。550 g だったため、これ以上体重を低くすると体調を崩す可能性が生じてくるころまで空腹な状態である。

この状態で餌を見せながら鶏がいるゲージ前まで行くと P 個体を驚かせることなく通過することができ、犬から 3 メートル離れた地点で鳴かれても、餌を見せながらであれば気にせず食べていたので、やっと訓練を先に進めることができると安堵した。しかし、突如目の前の道路から車が現れこちらに向かってきたため、再び驚いて暴れる状態になってしまった。訓練を続行することができない状態になってしまったため、P 個体を元のブースに戻そうと引き返す途中にまた鶏のゲージ前で驚いて暴れ始めてしまった。先ほどは驚かなかったのもう平気であると判断し、油断していたのが仇となった。一度大丈夫であっても、そのときの体調や状況によって再び嫌がることもあるということを知った (12. 8. 29)。



写真 30. 体重を測る

P 個体を外に連れて行こうと近づくと、筆者とは反対方向に飛んで逃げる。拳に乗ろうともせず、体重計にもすぐに乗らず周囲を見渡していたため、集中できていないように感じた。体重を測ってみると少し重くなっていたので、餌を食べたいという欲求よりも周囲が気になる状態が勝っていたのだと思われる。P 個体を店内で据えた際に、身体を震わせて羽根を膨らませ、身体のを抜いている状態 (写真 31) をしたためリラックスしていると判断したが、突如飛んで暴れだした。なぜ暴れたのか、筆者には原因が分からなかった。糞をしたが量が少なかったため、無理やり体外に糞を出し、身体を軽くして早く逃げるができるように準備をしているのだと K から教えていただいた。糞の量が多ければリラックスしていると判断するそうだ。しかし、飛ぶ気があるときでも身体を軽くするために少量の糞をするの

で、嫌がっているのか、それ以外なのかは他の身体の変化や周囲の状況を見て見極めるしかなかった(12.9.12)。



写真 31. 羽根を膨らませる(P 個体)

P 個体に生きた鳩を獲らせて狩りの訓練をした後、血だらけの P 個体の足を洗おうとシャワーを近づける。以前シャワーを近づけたときはシャワーの反対方向に飛ぶ逃避行動が見られたが、最近大雨のときに外に出してずっと雨に打たれて濡れることに慣れたのか、今日は頭からシャワーを浴びせても逃げることはなく、シャワーの水を浴びながら水分補給もしていた(写真 32)(12.9.20)。



写真 32. シャワー

P 個体の渡りをしていると数羽カラスが集まり、P 個体の背後にまとわりついてくる。今のところ P 個体に攻撃はしてこないが、P 個体が移動する度に後ろからカラスがついてくる。P 個体もカラスが嫌なのか、木に止まっているときにカラスが隣に来ると筆者が呼んでいないにもかかわらず、すぐこちらに戻ってくる。カラスから逃げるという行動であれば、わざわざ筆者のもとへ来なくても隣の木や別の場所へ移動すればいいのだが、こちらに来るとことは筆者のもとに戻ると比較的安全であると判断してくれているということなのだろうかと感じられた(12.9.25)。

傘仕込みを行うため、餌を見せずにジャンプ傘をひらくと同時に P 個体は傘がある方向とは逆方向に飛んで嫌がった。しかし、餌を食べさせながら傘を開くと、開いたと同時に身体をビクッと震わせて食事を中断し、傘を見るだけで飛んで逃げようとする行動は見られなかった。これを数回繰り返していくうちに傘を見る時間が短くなり、最終的には傘を開く動作をしても無視して餌を食べ続けたため慣れたと判断した(12.9.29)。

訓練開始直後は、筆者に対して攻撃するか逃避するかの二択であったが、次第に餌を見せなくても拳に乗ってくるようになった。このとき、筆者はやっと鷹に信頼してもらえたと感じたが、日によって自

ら拳に乗って来るときもあれば、嫌がって逃げるときもあった。そもそも、鷹にとって人の拳に乗るといふ行為は好んで行う行動ではない。そのため、いくら長年付き合っていたとしても、鷹が満腹などで餌に釣られない状態であったり、鷹が不快に感じる何か身近にあれば、慣れている人でも逃避行動を起す場合もある。また、上記の例のように鶏が急に暴れたことがきっかけで驚かせてしまった場合、例えその鶏が暴れていなかったとしても、その場に行くだけで同じ感情が蘇る(トラウマになる)といったような行動が見られた。これにより、鷹は不快に感じた対象や状況を記憶することができ、その記憶は長期に及ぶということが分かった。さらに、訓練中にカラスに攻撃される事例に関しては、何から逃げるという行動ひとつでも、どこかへ逃避する場合と、筆者のもとへ逃避してくる場合の2種類あることが分かった。そのため、鷹にとっては逃げる対象であった筆者が、何かから逃げて避難できる対象に変化したことに鷹との関係のなかで歩み寄りを感じた。

2年目

5日間の餌抜きを終え、餌を持ってP個体に近づくと驚いて小屋中を飛び回って低い声で鳴いて威嚇してきた。筆者から一番離れた部屋の隅に移動し、背を向けたまま顔だけこちらにむけて様子をうかがっている状態である。瞳孔も小さく、羽根も身体にはりついていてため、いつでも飛んで逃げることができる様子であった。そのままゆっくりと近づいてパーチの上に餌を持った拳を差し出したまま、顔をP個体からそむけて動かずにいると、ゆっくりとこちらに歩いてパーチに戻ってきた。筆者の顔と筆者が手に持っている餌を交互に見つめ、一歩ずつ近づいてくる。そして素早く少しだけ餌をかじっては筆者を見つめ、筆者が動かないことを確認するとまた一口だけ餌を食べた。大丈夫だろうと判断したのか、片足だけ筆者の拳に乗せ、ゆっくりと食べ始めた。P個体が乗った方とは反対の手で小屋の扉を静かに開け、パーチから徐々に拳を離すと肉に釣られて両足とも拳に乗ってきた(13.8.19)。

訓練2日目。餌を持って近づくと飛び回り、前日と同様背を向けて部屋の隅から顔だけこちらに向け

た状態でじっと見てくる。こちらに近づいてきてくれるまでにかかった時間は初日よりも長かった。これは5日間の餌抜きを終え、昨日は久しぶりに餌を見たため、餌が欲しいという欲求が強く、今日よりも比較的早く餌を食べに来たのだと考えられる。今日は昨日よりも餌ではなく周囲の状況を見る余裕があったため、こちらに来るまでに時間がかかったのかもしれない。しかし、母が小屋に入ってP個体に近づいても、片足を上げてリラックスしていた状態から両足を出した状態に変わるだけで鳴いたり飛び回ったりはしなかった。そのため、いつも見慣れている家族に対してもかなり慣れたのではないかと感じられた(13.8.20)。

餌の喰いつきもよく、拳を差し出すとすぐに乗る。しかし、自宅で飼っている犬を見つけるとそちらを凝視して動きが止まってしまう、犬に吠えられると驚いて犬とは反対方向に逃避した(13.8.21)。

小屋内にあるパーチと30センチメートルほど離れたところから餌を見せると飛び乗ってきたが、餌なしだとまだ来ない。輸送箱に入れて箱の扉を閉めようとする、暴れて輸送箱から飛んで出てきた。もう一度拳に乗せて翼を閉じてP個体が落ち着くまで待ち、もう一度箱に入れようとする、暴れずに入った。おそらく、入る直前で犬が近くにきたので驚いて箱から飛び出てきたのではないかと考える。30分輸送箱に入れたままの状態でも、輸送箱の中で暴れたり鳴いたりはしなかった。そして、今期の訓練が始まって初めてP個体の胸の部分を手で触ってみても攻撃してくることはなかった(13.8.25)。

以前と同様にP個体を輸送箱に入れようとする、周囲に犬がいなくても暴れて箱から飛び出してくる。2~3回目でやっと大人しく入る状態であった(13.9.6)。

スクリーンパーチができたので初めて外に繋いでみる。犬がP個体に向かって吠えると犬とは反対方向に飛んで逃げようとするが、周囲を犬が歩きまわる分には気にしていない様子であった。シャワーを遠くから徐々に近づきながらかけたため、去年のように驚いて逃げることはなかった(13.9.10)。

初めて一人で鷹の尾羽に鈴板と尾鈴をとりつける。爪嘴で捕まえられたのを覚えているようで、鷹の背後に右手をまわしただけで右手とは反対方向に飛ん

で暴れられた。本当に筆者のことを嫌がってしまうと飛んで逃げてしまうという不安があったため、作業が終わった後確認をした。餌をやった大緒の距離で呼ぶと、筆者の拳まで来てくれたので安心した(13.9.15)。

フリーにすることができ、片道 50 メートル先まで飛んで戻ってくるができるようになった。しかし、相変わらず訓練に行く前に小屋に入って筆者が近づくと、筆者の反対方向に飛んで逃げる。そのため、爪嘴と鈴を取り付ける際に筆者に捕まると嫌なことがあると思われてしまったのかもしれないと不安を抱いた(13.9.20)。

警戒心が強い初日より翌日の方が逃避していた時間が長かった事例からは、空腹が満たされ、周囲の状況を見て判断する余裕があれば、好んで人に近づいてくることはないのではないかと感じられた。この部分が、餌がなくても人に寄って来る犬との違いだと思われる。また、爪嘴や輸送箱、犬の事例からも、1 年目での鶏の事例と同様の行動をみることができた。

まとめ

以上をふまえ、鷹の逃避行動は自身が不快に感じる対象とは反対方向に飛ぶ行為であり、身の危険を感じれば食欲よりも逃避が優先されるということが分かった。また、1 年目の鶏の事例や 2 年目の犬の事例のように、何かに驚くなど 1 度経験した不快な出来事は、例えその場に原因がなくなったとしても場所や対象と関連づけて記憶することができるうえ、その記憶を活かして後の展開を予想し、前もって逃避できるのではないかと考えられる。そして、カラスから逃避する事例からは、不快な対象から逃げてどこかへ逃避する場合と、その対象から逃げて自分の安全地帯となる場所に逃げ込む場合の 2 種類あることが分かった。この相手にとっての安全地帯の対象になることが信頼されている証拠にもなりえるため、以前は鷹にとっては逃げる対象であった筆者が、鷹にとっての安全基地に変化したことが鷹からの歩み寄りを感じる要因でもあった。

3-4 安心

ここでは、鷹が緊張を緩める条件や、筆者に対して気を許した瞬間を見ていく。鷹からの受容は、筆者の鷹に対する恐怖を急激に緩和していった。このように、動物がどのような行動をしたら人は愛着が湧きやすくなるのかという点を見ていく。

1 年目

I 個体を小屋から離れた店内で 1 時間据えていると、据え始めは頭を低く下げて前かがみだった鷹の姿勢(写真 33)が徐々に背筋を伸ばし、最終的には真っ直ぐに背筋を伸ばした状態になった。片足立ちにはなっていなかったため、完全にリラックスしているとまではいっていないが、羽を震わせ緊張をほぐす行為をしてくれたことを嬉しく感じた(12.9.6)。



写真 33. 姿勢を低くする

P 個体に初めてフードを被せて小屋から店舗まで連れて行き、フードを付けた状態のまま 30 分間据えた。手元に餌を持ってフードを外すと周りを気にせずすぐに足元にある餌を食べはじめた。テレビもついていたうえ、他のハリスホーク個体や K の 2 歳児の娘もいたため周囲を見回してはいたが、最終的には羽根を膨らませて比較的安心した状態になっていた(12.9.8)。

店舗前にあるパーチに I 個体 P 個体を並べて(写真 34)2 時間外に繋いだ。I 個体は外にいる間ずっと鳴き続けていたが、P 個体は体を震わせたり羽繕いをして、最終的には片足をあげた状態になった(写真 35)。この時点で筆者は、周囲の環境に順応すること

が早いのは、人に慣れている I 個体よりも P 個体の方かもしれないと感じた。扉の開閉の音にも慣れたが、小さな子供が近づいたり、走りまわっている姿を見ると驚いて暴れてしまう。しかし、餌を見せずとも「ホッ」という掛け声だけで飛んで拳に乗ってきてくれるようになった(12.9.15)。



写真 34. P 個体(手前)と I 個体(奥)

P 個体を外につないでさらしている際、以前は片足をあげてリラックスしている状態(写真 35)でも筆者が近づいたり、近くの扉で人が出入りするとすぐに足を下ろしてそちらを見るという行動をとっていた。しかし、今日は人の出入りがあっても、筆者が目の前まで近づいても、そちらを見るだけで気にせず片足を上げ続けていた(12.9.16)。



写真 35. 片足を上げる

今日は嵐だったので室内で据えた。するとすぐに体震いや羽づくろいをするようになり、筆者が手で P 個体の足を触っても攻撃されなかった。背筋も据える度に真っ直ぐになり、瞳孔も心なしか大きくなっているように見えたため、出会った当初よりも可愛い印象を受けるようになった(写真 36)(12.9.17)。



写真 36. 瞳孔大

岐阜から帰宅し、そのまま実家の室内で P 個体を据える。何回も糞をし、据え始めてたったの 10 分で拳の上で片足立ちをした。これが拳の上で片足を上げてくれた最初の瞬間である。その後も交互に足を入れ替えては常に片足を上げた状態であった。P 個体にとっては初めての景色、初めて見る人間ばかりの環境であるにもかかわらず、今までになかったほど緊張を緩めてリラックスしていた状態だったため、筆者は P 個体がこんなにも環境になじみやすいとは思っていなかったと驚いた(12.9.21)。

P 個体の訓練終了後、自宅の庭に作った小屋の中にあるパーチに戻すと、すぐに片足を上げてリラックスする状態になるようになった。小屋にも慣れたようで、「ここまでくれば安全だ」と思ってくれているように思えた(12.10.10)。

P 個体にとっては初めての景色、初めて見る人間ばかりの環境であったにもかかわらず、今までにないほど緊張を緩めた状態だった。このことから、鷹

は本人にとっての“初めて“に怯えたり、警戒しているのではなく、自分にとって害が少ない環境であると判断したときや、周囲の状況を受け入れたときに緊張を緩めているのではないかと考える。

また、P 個体の反応は、次第に筆者が近くにいても気を許した状態となったり、身体に触れさせ、筆者が近づいても驚いたり嫌がったりしなくなっていた。この劇的な変化を見て筆者は、以前 P 個体に対して抱いていた攻撃される恐怖や、思うように訓練が進まない悔しさではなく、可愛らしいという感情を抱くようになった。このように、相手に近づいても避けられなかったり、身体に触れることを受け入れてもらえたりするようになると、相手に対しての親近感や仲間意識が湧き、相手に対する感情や対応に変化が現れるのではないかと考える。

2 年目

P 個体を室内で 1 時間半据える。すると片足を上げるのではなく、片膝を筆者の拳に置くという体勢をとった(写真 37, 38)。この姿を見るのは初めてだったため Y に写真を見せると、これも片足上げと同様リラックスしているという仕草だと言われた。どちらがよりリラックスしているかという差はあまりないということだったが、筆者は片膝を拳の上に置く姿勢の方がリラックスしているように見えた(13. 9. 3)。



写真 37. 肘を置く①



写真 38. 肘を置く②

P 個体を室内で 1 時間据える。以前は片足立ちをしている時に、筆者が P 個体の胸を触るとすぐに上げていた足を降ろしていたが、次第に慣れてきたのか、頭や胸、上げていた足を触っても目で指の動きを追うだけで片足立ちのまま動かずにいるようになった。足を伸ばそうと思えば掴めるほど紐は緩いが、掴まないという選択をしてくれていることが嬉しく思えた(13. 9. 16)。

室内で据えるときには、初めて 10 分も経たないうちに片足を上げた状態になるようになった。いくら身体に触っても片足を上げたまま指を見るだけで、攻撃してくることはなかった(13. 9. 25)。

多忙であったため、2 日ぶりに P 個体を据える。小屋に近づいただけでいつも以上に激しく掠れた声が出た。怒っているように感じたが、室内に連れてきた途端に大人しくなり、すぐに羽根を膨らませた状態になった。水が流れる音がするキッチンの方に向けて飛ぼうと姿勢を低くする度に、筆者が「煉、ダメよ！」と言いながら身体をつつくと大人しく向き直る。偶然だと思うが、餌で釣る以外では言うことを聞くことがないと思っていた鷹が、指示だけで言うことを聞いているかのような行動に筆者は嬉しく感じた(13. 10. 23)。

去年は片足立ちをしているときに、胸や身体を触るとすぐに上げていた足を下に降ろし、筆者の手を避けていた。しかし、2 年目には片足を上げていた時に頭や胸、足を触っても目で筆者の指の動きを追うだけで全く体勢を変えようとはしなかった。この行動の変化から、P 個体は筆者の触れるという行為

に対して比較的害が少ないものだと認知し、判断したため、攻撃せずにいたのではないかと考えられる。また、筆者の言葉だけで向き直るといふ事例からは、筆者が声を発したり身体に触れることでP個体の注意がそちらに向いただけであるが、筆者はまるで言うことを聞いてくれたのではないかと認知した。この相手の行動をコントロールすることができたという感覚は、ペットのしつけや芸においても重なる部分があるのではないかと考えられる。

まとめ

以上のことから、鷹は周囲の環境が自分にとって影響が少ない環境であると判断したときに緊張を緩めているのではないかと考える。また、筆者がP個体の身体に触る際、去年までは触ることに対して嫌がって逃げるか攻撃をしていたが、筆者が次第に足の紐を緩め自由にさせているにもかかわらず、筆者を「攻撃しない」と判断したのは、その状況に慣れたために害が少ないと判断したのだろう。それに対して筆者は、「触れる」という筆者の愛情表現を鷹に受け入れてもらえたと感じただけで、恐怖を抱いていた対象から愛着が湧く対象へと、相手に対する感情や態度が急速に変化していることがうかがえた。

さらに、P個体が筆者の言うことを聞いたと感じられた事例から、P個体は筆者が声を発したり、身体に触れたことで注意が筆者に向いただけである一方で、筆者はまるでP個体が言うことを聞いてくれたのではないかと感じていた。この相手の行動をコントロールし、自分にとって都合がいいように動かせたという感覚に、愛着が湧く要因があるのではないかと考えられる。

3-5 興奮

この項目では、鷹にとっての心理状況の表現方法や執着、狩りに対するP個体と筆者の積極性の変化を見ていく。

1 年目

P個体の訓練時、渡りの最後にルアー仕込みを行った。ルアーを投げると足で掴んで地面に降り、ルアーに付いている餌を食べ始めた。ルアーの餌を食べ終わったのを確認し、鷹を拳に戻そうと餌を持っ

て鷹の背後から近づき、横から拳で握った餌を見せる。すると、興奮していたのか片足は餌が付いていないルアーを掴んだままで、もう片方の足は筆者の拳にある餌を掴み、離さなかった(12.8.31)。

P個体もI個体と同様、距離が離れてもこちらへ飛んでくるようになった。ルアーに対しては、P個体の方が足でしっかりと掴む一方で、I個体はルアーをすぐに足から放すこともあり、あまり足で掴んでいる気配は感じられなかった。ルアーを掴むことで興奮している様子もなく、I個体の方が獲物などに対する執着が薄いのではないかと感じられた(12.9.5)。

P個体に獲物の捕り方を教えるため、生きている鳩を用いた。鳩の羽根に紐をくくりつけ、その紐を地面に埋め込んだ杭に結んである。鳩は暴れることはできるが、飛ぶことができない状態である。その鳩を5メートルほど離れたところからP個体に見せる。鳩が全く動いていない状態だとP個体は鳩の存在に気付いていなかった。しかし、鳩が暴れ出した途端に自ら飛び立ち、鳩を上から抑え込んだ。生きている獲物を見ることは初めてだったが、躊躇することなく飛んで抑えつけたため、この獲物に対する反応の良さに対して筆者は嬉しく感じた。しかし、興奮して鳩を逃がさないように掴んではいるものの、ルアーのように捕らえた後はどうしたらいいのか分からないようで、暴れる鳩を抑えつけたままなかなか食べようとはしなかった。獲物の周りを翼で覆い隠す行動(写真39)をとり、鳴きながら周囲を見回す状態が続いた。時折、足で鳩を掴んでは引っ張って逃げようとする行動が見られた。この行動を「獲物を捕ったその場で食べる」という行動に教えなおすため、警戒しているP個体に近づいて人の手で鳩の羽根をむしり、指で鳩の横腹に穴をあけてP個体に血肉を見せた。すると、やっと自ら鳩の肉を食べ始めた。筆者にとって、鳩を自分の手で殺し、鳥をさばくということに対してかなりの精神的な負担があったが、P個体を鷹であらしめるための大切な行為であると思って我慢するしかなかった(12.9.20)。



写真 39. ルアーを羽根で隠す

P 個体の渡りをしている際、木に止まっているとカラスに追い立てられすぐこちらに飛んで戻って来た。興奮度が増しているのか、いつも拳に止まるときよりもカラスに追われた後の方が拳に止まったときの足の力が強かった(12.9.25)。

K と協会の会員 M と共に狩りに出かけた。会員 M はハリスホークの雌を所持しており、ハリスホークは群れで狩りができるので、獲物に向けて2羽同時に投げることができるからやってみようということであった。さっそく川の側に生えている枯れ木にゴイザギの若鳥が数羽止まっているのを確認し、会員 M と両側から飛ばして挟み撃ちにする作戦を決行した。ゴイザギが私たちに気付いて飛び立つのと同時に鷹を飛ばす。すると筆者の目の前で P 個体がゴイザギを空中で捕らえてそのまま浅瀬に落ちた。そこへ向かおうとせずして獲物を捕獲できなかった会員 M のハリスホークが P 個体の掴んでいる獲物を見つけて掴みかかりに来てしまい、餌の取り合いになってしまった。挙句の果てに P 個体は相手のハリスホークに胸を掴まれ、頭をつつかれるという怪我を負ってしまった。この獲物の取り合いを見て K がこのままでは危険だと咄嗟に判断し、P 個体と会員 M のハリスホークを引き放した。初めての獲物を捕獲したが、P 個体は獲物を捕獲した興奮と、直後に経験した恐怖に身体は震え、獲物をつかんだまま硬直していた(写真 40)。



写真 40. ゴイザギを獲る

このままでは狩りに対して悪い印象しかなくなるのではないかと危惧したため、すぐさま獲物の羽根を抜いて肉を見せ、ゴイザギを食べさせることで狩りの後に良いことがあったと思ってもらえるように促した。筆者自身も初めての狩りでいきなり獲物を捕獲できたという嬉しさはあったが、それ以上に P 個体を怪我させてしまったという不安の方が大きかったため素直に喜ぶことはできなかった。この後、すぐに P 個体に抗生物質の薬を飲ませ、数日間療養させなければならなかった(2012.12.3)。

K と共に狩りに行き、実際に鷹狩りを見たり、獲物がある場所に行き P 個体を獲物がある状態で飛ばすという経験をさせていただいた。しかし、餌の食べさせすぎによる獲物への積極性のなさや体力不足によって、P 個体の獲物を獲りたいという気持ちを筆者が引き出せていなかった。また、P 個体は獲物の存在に気付いているのに筆者が分かっていなかったために反応が遅れ、タイミングを逃してしまうということや、筆者が獲物の存在に気付いていては気持ちだけ焦ってしまい、P 個体が分かっていない状態で飛ばして全く見当違いのところへ飛んでいってしまうということがあった。このような失敗ばかりが数多くあり、機会を用意してくれている K に対しての申し訳なさと、筆者の経験や技術がないばかりに P 個体に狩りの機会をさせてあげられてないという P 個体に対する申し訳なさを感じた(2012.12)。

再び K の狩りに同行させていただいたが、何度チャレンジしても獲物を獲ることができなかったため、諦め半分で田にたむろしているハンボソガラスに向けて飛ばしたところ、P 個体はカラスを追いかけ、

逃げそびれた 1 羽を捕らえることができた。筆者は飛ばしたその場で浮かれて喜んでいたら、K から「カラスは攻撃的だから早く助けに行かない」と言われ、急いで P 個体の側に駆け寄り、カラスが逃げないように左右の羽根を組んで飛ばないように固定した。大人しくなったカラスを P 個体に食べさせ、その後また怪我をしてないか P 個体の身体を確認した。前回と同様に頭を攻撃されたようで、羽根が一部はげかかっていた。それ以外に目立った外傷はなかったので、ひとまず安堵した。経験したこれらの狩りから P 個体が頭を攻撃されるのは危ないということを知れば、獲物を獲り押さえる技術が向上するだろうという期待もあった。しかし、そのときにも失明していたり、重症になっていたらと考えると、筆者の狩りに対する積極性は次第に薄れてきていった。ここに、P 個体に狩りの経験を積んで技術を学び、成長してほしいという思いがある反面、危険な目にはあわせたくないという筆者の葛藤があった(2012. 12. 6)。

興奮すると足に力が入り、自ら足を開く行動がしにくくなるようであった。鷹がこのような状態のときに、人が指で鷹の足を開き、足の開閉を柔らかくして次の行動に移りやすくするという動作も必要であると教えられた。この足を触るという行動は筆者にとって、いつまた攻撃されるかが分からないという恐怖を常に呼び起こすため、できれば一番避けたい行為であった。また、P 個体に鷹としての狩りの本能を呼び起こさせ、技術を向上させるためには生きた鳩をさばくという筆者にとっての精神的な負担を負わなければならないということを知るとともに、狩りを成功させるには鷹自身の技術の向上だけでなく、筆者も鷹と共に経験を積んで成長していかなければ狩りへの成功はないということを知った。しかし、獲物を捕獲した 2 回とも怪我をしてしまっているため、P 個体にとっては狩りの良い経験であったかもしれないが、筆者にとっては P 個体が怪我をするという点で狩りに対する積極性が薄れ始めていく原因にもなった。

2 年目

今まで P 個体はカラスに追われると、逃げて筆者

の方へ戻ってくるか無視をする、またはカラスを避けて木に止まるという行動をとっていた。しかし、今回は飛ばすと木に止まっている 3 羽のカラスの真ん中に突っ込んでいき、戻ってきた時には、興奮していたのか足で握る力が少し強かった。この行動に対して、筆者は P 個体の成長を感じ、嬉しく思えた(13. 9. 23)。

会員 N と共に狩りへ行った。会員 N は筆者が初心者だからと獲物が獲りやすい場所を案内してもらい、獲物を見つけた。獲物が飛び立つタイミングを見計らって鷹を飛ばす。すると P 個体は獲物を追いかけてそのまま 50 メートルほど先まで飛んで行き、途中から姿が見えなくなった。急いで追いかけて P 個体を探すが、上空にカラスが数十羽飛んで群がっていたため、追い立てられてどこかに行ったのかもしれないという不安がよぎった。今回は発信機を P 個体に付けずに飛ばしたため、もし逃げてどこかへ行ったとしたら自分の掛け声と眼だけで地道に探すしかなかった。しかし、なぜか筆者は呼びつければ P 個体は戻ってくると心のどこかで思っていたため、不安はあったが 1 年目のように焦って何もできないという感覚はあまりなかった。案の定、P 個体はカラスに巻かれて逃げることなく川の浅瀬にいた。獲物が水に潜ったのを見失ってそのままその場で待機していたのか、筆者が呼ぶまで自分で獲物の行方を川に沿って探していたのだと思われる。今回狙ったバンという獲物は攻撃性も低いというえ、川も浅く、道路からも離れていたため、かなり狩りがしやすい状況であった。それだけに「もし獲れていたら P 個体に狩りを経験させてあげられたのに」とおしい気持ちが大きかった。会員 N からは筆者が飛ばすのが遅すぎたのが原因であった、もっと早くに飛ばしてあげていたら獲れていたと言われ、自分の狩りの技術・経験のなさによりいっそう P 個体に対して申し訳ない気持ちであった(2013. 12)。

2 年目になると、普段の訓練ではいつも避けるか無視していたカラスに対して攻撃的な一面をみることができた。1 年目はハシボソガラスを一羽獲っていたこともあるため、P 個体がカラスを苦手だと思っているかは定かではない。集団で威嚇してくるため邪魔なだけとしか考えていないかもしれない。し

かし少なくとも筆者は、P 個体はカラスが苦手だと思っていたため、カラスに対して攻撃的になったという P 個体の進歩に、子どもの成長を喜ぶ親心のような感情を抱いた。また、筆者には狩りに対して怪我がつきものであるという意識が強くある。そのため、狩りをするのであれば浅瀬で、なおかつ道路や民家から離れている P 個体の安全面が確保された場所のみでしか、なるべく狩りをやりたくないと思いつていることがうかがえる。

まとめ

上記の例から、鷹の足の力の入れ加減は鷹の心理状態と呼応しているため、この加減を読み取ることが鷹の心理状態を把握することができるということが分かった。また、筆者はカラスが苦手だと思っていた P 個体の成長に対してとても嬉しく感じていた。これには、「自分が育てた」という親心のような愛着を動物に対しても感じているためである。このような愛着が強ければ強いほど「成長」に対して敏感になり、動物の能力及び成長を自分自身の能力及び成長と同一のものだと思いやすくなるのではないかと考えられる。そして、カラスから逃げて筆者の方へ来るといったような相手を頼るという行動を動物から受けると、例え言葉が通じていなくても相手から信頼されているのではないかと感じ、自分もその相手を信頼しやすくなるのではないかと思われる。狩りに関して言うと、鷹を鷹としてあるようにするために筆者は生きた獲物をさばくという精神的な負担を追わなければならないということや、狩りを成功させるためには鷹自身の技術の向上だけでなく筆者も鷹と共に経験を積んで成長していかなければならないということ、また、狩りをするには必ず鷹のリスクに対して覚悟しなければならないということ学んだ。P 個体は獲物を捕獲した際に怪我をすることが多かったため、P 個体にとっては狩りに対する良い経験であったかもしれないが、筆者にとっては P 個体が怪我をするという点で狩りに対する積極性が薄れ始めていく原因にもなった。そのため、獲物を取り逃がしたときは獲れなかった悔しさよりも、無事に戻ってきたという安心感の方が次第に強くなっていった。

3-6 要求

ここでは、鷹が攻撃以外での要求行動が可能であるかという点、そして筆者が鷹からの要求だと受け取った行為を見ることで、人と鷹のコミュニケーションの成立を見ていく。

1 年目

I 個体は前章で説明した通り産まれたときから人間に育てられているため、P 個体に比べて人に慣れているという特徴がある。そのため、I 個体も P 個体と同様、餌を抜き終わった状態から訓練を始めたにもかかわらず、訓練初日から筆者の拳に乗って餌を食べる行為を見ることができた。I 個体は、初対面の人物に対しても高い声で「ピーピー」とよく餌鳴きをする。筆者を見ても威嚇することもなく瞳孔も大きく開いているため、P 個体に比べて可愛らしい印象を受ける。鷹からの攻撃や威嚇行動の有無だけで、筆者が鷹に対して抱く印象は大きく変わった(12.8.20)。

P 個体は近づいてもこちらを見るだけで鳴くことはあまりないが、I 個体はブースの前を通るだけで鳴く。鷹が自分の母親(または兄弟)などの同じ種族に対する要求や接し方を人間にも向けてくるのだと K は言っていた。一方で鷹に育てられた P 個体は、自分は人間とは違う種族だと分かっているため、例え人が餌を与えてくれても簡単に慣れたりはいしない。このように、育て方の違いが鳴き方や甘え、要求にも影響する(12.8.30)。

I 個体をいつも訓練している場所まで連れて来ると、自分から奥に置いてあるパーチへ飛んでいった。この場所に来たらすることをすでに覚えているのではないかと感じた。呼んでいないのに来るため、筆者に対して早く肉を与えるようにせかしているように思えた(12.9.3)。

P 個体は足が固く、以前はパーチに移すだけでも困難であった。しかし今回はすぐにパーチに移り、5メートル、10メートルと離れても飛んで来るようになった。体重計の数値が低かったのが空腹だったのか、筆者に慣れてくれたのかは分からないが、P 個体も I 個体と同様に餌合子で呼んでないのにこちらに飛んで来るようにまでなった(12.9.5)。

I 個体は筆者の方に行けば必ず餌が貰えると覚え

たのか、餌欲しさに呼んでいないのにこちらに飛んで来るし、背を向けていても無理やり止まろうと筆者の背に爪をかける(12.9.15)。

P 個体の体重計の数値が高かったが、拳に乗せると餌が入っている丸鳩入れに頭を突っ込むほど餌への反応が良かったのを確認したため、渡りの訓練を行った。P 個体も呼ばなくても来るようになったが、呼ばずに放っておいたり、飛んできて避ける仕草をとると、筆者の近くにある木や地面に止まってこちらを見ながら呼ばれるのを待つという反応が見られた。I 個体は以前から拳に止まった際に爪が餌合子にかかり、筆者が餌合子の蓋を閉めることができずその状態のまま全ての餌を食べられてしまうという問題に直面していた。そのため、I 個体の足が餌合子にかからないよう拳に止まる直前に餌合子を少し内側に傾けて、筆者が I 個体の止まる場所を調節するよう K にアドバイスをもらった。しかしこれをするとう I 個体は食べにくいと判断したのか、筆者の内側に回り込み、掌側から餌合子に直接止まって食べるという行動をした。この行動を覚えさせてしまうと変な癖が付いてしまうため、同じことを繰り返さないように気を付けなければならなかった(12.9.19)。

I 個体の訓練時、筆者の元へ飛んで行けば餌が貰えるという思考を、呼ばれて行けば餌が貰えるという反応に教えなおす。そのため、飛ばした後もしばらく呼ばずに無視することにした。今のところ、木に止まって3秒後にはこちらに戻って来てしまうので、繰り返し覚えさせる必要があった。呼んでいないのに戻ってきたときには餌をやらないという教え方を K に相談したところ、そこまですると逆に戻ってこなくなる可能性もあると言われた(12.10.8)。

I 個体は P 個体に比べて人に慣れているという特徴があるため、人間に対しての要求行動が活発であることが見受けられた。それに加え I 個体は瞳孔が大きく可愛らしい印象を受けるため、筆者に友好的な関係を築きたいという気持ちを起こさせやすい。訓練もスムーズに進めやすく、相手に抵抗する行為が少ない性質は人により愛着を抱かせやすいということが言える。

2 年目

P 個体は今日空腹だったのか小屋の扉前まで来ており、餌がなくても拳に乗ってきた(13.8.30)。

10メートル近く離れていても呼んでいないのにこちらへ飛んで来る。呼ばずに放っておくと、木や看板など様々な場所に止まりながら姿勢を低くし、いつでも飛べる状態でこちらを見てくる。呼ぶとすぐに飛び立ってこちらへ戻ってくる。訓練が終了し、外にあるパーチにつなぐと嘴を開けず鼻で「クークー」と鳴いた。この鳴き声は初めて聞いたため何を意図しているのかが分からなかった。この声は餌を食べ、自分の小屋に帰って来たときのみ鳴くため、筆者はこの声を甘えや要求など「威嚇」以外を意味するのではないかと判断した(13.9.9)。

餌合子で呼ばなくても、筆者が歩いて移動するだけで後ろから飛んでついてくる。ずっとこちらを注意深く見つめ、筆者がいる場所の近くにいることで呼ばればすぐに行けるようにしているようであった(13.9.24)。

その日の餌やり後、初めて餌鳴きの「ピーピー」という声や鼻で鳴く「クークー」という声ではなく、ヒヨコのように「ピッピッ」という小さく高い鳴き声を聞いた。そして筆者の声に反応して足を握り返してくるような反応があった(13.10.4)。

体重が610gだとP 個体は小屋の入口前まで飛んできており、拳へすぐに乗ってくる。筆者の近くに小学生の男の子がいたが、気にせずこちらへ戻ってきた(13.10.5)。

その日の訓練終了後、小屋内にあるパーチにつないだ。いつもならそのまま目を逸らすか、筆者の手をつかもうと姿勢を低くしてこちらを見てくるのに対して、今日はパーチにつなぐとすぐにパーチから下りた。P 個体はそのまましゃがんでいる筆者の背後に歩いて回りこみ、餌合子をつついては筆者の顔を見つめるという行為を繰り返した。そのまま様子を見てみると、つついては筆者の顔を見て度々餌合子の紐を噛むなど、まるで筆者の反応をうかがいながら「もっと餌が欲しい」と要求しているように感じられた。これには、筆者が餌合子の中に餌があるということをP 個体は分かっていると思ったということが前提にある。この後、筆者がP 個体の方に振りむいたり、立ちあがってもP 個体は驚いて逃げる

ことはなく、下から筆者の顔を見上げたままであった。瞳孔は大きく、羽根もふっくらとした状態で、筆者が小屋を出てからも小屋の入口まで来て筆者を見ていた。筆者は、P 個体からの明らかな要求と受け取れる行動を見たのは初めてであった(13. 10. 11)。

朝、すでに小屋の入口まで P 個体が来ていた。今までだと P 個体が入り口にいても、筆者が小屋に入れば奥にあるパーチに戻っていた。しかし今回は、筆者が小屋に入っても、P 個体を足でまたいで、目で追うだけでパーチへ戻ることはなかった。この行為から筆者は、P 個体は筆者の足元をうろついても害はないこと、もしくは筆者が避けてくれることを知っているのではないかと思った(13. 10. 12)。

筆者の声や足音がすると姿が見えなくても小屋の中から鳴く。特に訓練前の空腹時と筆者が帰宅する夕方に多く見受けられ。家族の呼びかけや足音で鳴くことはなかった(13. 10. 13)。

2~3 日前から、訓練が終了したすぐ後ではなく数時間経過していたとしても、筆者の姿を見た時のみ「クー」と鼻で鳴く声を出すようになった。現在のところ筆者以外の家族はこの声を聞いたことがないようだ。この鳴き声は餌鳴きや威嚇のときのように大きな声で鳴く単調なものではなく、まるで喋っているかのような抑揚と強弱をつけて鳴く。筆者がその声に応じて喋りかけると、また P 個体からその声が返ってくる。この時、筆者はまるで P 個体と会話をしているかのような感覚を覚えた(13. 10. 15)。

名前を呼びながら小屋に近づくと鳴き始める。特に空腹な時は声が大きく力強い。その日も小屋の扉を開けると入口前まで来ていた(13. 10. 16)。

以前から P 個体は口に肉片が付いていると気にして次の行動に移せなかったため、P 個体の口に付いている肉片を筆者が指でとって食べさせていた。最近では、口に付いている食べにくい肉片を取ってほしいのか、口に肉が付いているときにだけ筆者の指を軽く噛んでくる。去年は筆者が口に触るだけで嫌がっていたため、かなり筆者に対しての許容範囲が広がったように感じた(13. 10. 17)。

P 個体にあげた松かさが少しバラけ、最初に置いた場所から移動していたのを発見した。松かさを避けようと P 個体を据えたまま片手で松かさに触れると、P 個体は筆者の拳の上で暴れて床に降り、松か

さの前で仁王立ちをしてこちらを見てくる。拳を差し出せばすぐに乗ったが、筆者には P 個体からまるで「これには触らないで」と言われているように感じた(13. 10. 19)。

今朝、小屋の中へ入ると P 個体はパーチから下りて筆者の後をついてきたり、筆者の周りを歩くという行為が見られた。帰宅して外のパーチに繋ぐとやはり「クー」と鼻で鳴く。小屋内にあるパーチにつながるとゆっくりとパーチから滑り降り、再び筆者の拳に自ら乗ってきた。かなり餌は食べているはずなので餌が欲しいというわけではないように思ったのだが、「エガケを見たら拳に乗る」という行動パターンが脳内で出来上がってしまったのか、もしくは何か伝えたいことがあったのだろうかと思はれた(13. 10. 26)。

P 個体を小屋内にあるパーチにつないで雑巾で床を拭いていると、雑巾に興味を持ったのか、こちらに飛んできて背後からまわって筆者の足の間から顔を出し、下から手に持っている雑巾を見上げてきた。雑巾に飛びかかって奪おうとすることはなく、ただ興味があるといった様子でずっと見つめていた(13. 10. 27)。

22 時に外へでて筆者が喋ると小屋の中から P 個体が鳴き始めた。しかし、筆者が黙って物音をたてずにじっとしていると鳴き止む。鷹は夜鳴くと他の動物に場所を知られるため、鳴かないと思っていたが鳴いたので驚いた。夜に鳴く行為は筆者以外の人物の声や足音では見られなかったため、筆者は P 個体が何かを要求していたのではないかと感じた。このような筆者の声や足音にしか反応を示さない P 個体に対して、筆者は、P 個体は筆者にしか自分の要求は伝わらない(もしくは欲求に応えられない)と思っているのではないかと思うようになっていた(13. 10. 28)。

訓練後、公園の杭に P 個体を止まらせて放置していると、筆者の方を見て「クークー」鳴く。自宅以外でも鳴く姿を見たのは初めてであった。筆者が喋りかけたときは黙り、筆者が黙ると再び鳴き始めたため、筆者には P 個体とまるで会話が成立したかのように感じ、より親近感が湧ききっかけとなった(13. 10. 29)。

筆者がすでに丸鳩入れを腰からぶらさげて小屋に

入ってくると、すぐに餌をもらえらると思っっているよう、何も持っていないときよりも足をバタつかせ、大きく鳴いてせがんでいるように感じた。大きい餌を食べているときは興奮しているためか、翼を下に垂らし、羽も逆立てた状態である(13. 10. 30)。

P 個体の鼻で「クークー」と鳴く行為は、餌を食べ比較的満足なときや自分のなわばりである小屋に戻ったときに主に見られるため、筆者はこの鳴き声を「威嚇」ではなく「甘え」や「要求」意味するものであると捉えた。さらに、この鳴き声には単調なものではなく抑揚と強弱をつけて鳴くという特徴があった。筆者がP 個体との会話のように感じた点からは、例えタイミングがあっただけであったとしても、筆者が発した言葉や行動に鷹が反応し、返してくれたことでコミュニケーションがとれたと一方的に判断していることが分かる。また、筆者の腰に付けている餌合子を嘴でつつくという行為に関しては、鷹は例え餌が見えていなくても「餌合子＝餌」と物事を関連づけて記憶することができるのではないかと考えられる。松かさや雑巾の例に関しては、「攻撃」以外の手段で自分の意思を伝えることができる知能があるのではないかと感じた。

まとめ

この項目から、日々関わることで鳴き声の変化という今まで筆者には見せていなかったP 個体の側面を見ることができた。筆者が近くにいるときにしか鳴かないという点から、鷹にも鳴き声で他種である人間とも関わりを持とうとする意思を持っているのではないかとということが考えられる。筆者が会話のように感じたことを嬉しく思ったのも、例え一方的な解釈であったとしてもコミュニケーションが成立したと判断するだけで、相手との距離が近くなったと感じやすいのではないかと考える。さらに、見えている餌であれば興奮して奪おうとするのに対して、見えていない餌を手に入れた場合は、奪うのではなく相手に自らの意思を伝達する要求行動を行うことができるのではないかとされた。この行動を受け取った筆者にとって、今まで鷹との関わりが接触など筆者から一方的なものだけであったのに対して、P 個体から筆者に関わりを持とうとしてくれたよう

に感じることでお互いの関係が近くなったと思える瞬間になった。松かさや雑巾の事例は、P 個体が相手に害を加える以外の手段で意思を伝えたことから、P 個体にとっての筆者は攻撃する対象から危害を加えない対象へと変化したのではないかと受け取るきっかけでもあった。

3-7 葛藤／迷い

この項目では、鷹が人間の行動や様子を観察したうえで、どのような判断や行動をするのかを見ていく。そして筆者が鷹が迷っていると判断した要素は何かを考えることで、鷹の行動を通してどのような感情として捉えているかも見ていきたい。

1 年目

P 個体の訓練では初日より近づいても暴れることはなくなっていた。餌なしで鞭を差し出すと頭だけ手前に出して拳を見つめるが、なかなか一歩が出ず躊躇しているといった印象を受ける。空腹感を感じているようで、餌を見せるとすぐ拳に乗ってきた。餌があれば乗るが、ない状態で乗るほどまでには慣れていない状態だと思われる。(12. 8. 21)。

I 個体は筆者の拳に乗ると、羽根が身体に張り付き緊張しているように見えたが、P 個体のように背中を丸めた状態のためらっているといった印象は受けなかった(12. 8. 22)。

P 個体に拳を差し出すと、身体は前のめりになるが筆者の拳をじっと見つめたまま動かなくなる。筆者の拳に乗ることが安全か、乗ることで何かいいことがあるのだろうかとかP 個体が迷っているように見えた(12. 8. 24)。

P 個体は相変わらず拳を差し出すと身体は前へ出て行きたそうにするのだが、足はまだ一歩踏み出せないといった感じであったので、気持ちの切り替えをさせるために朝ではなく夕方まで餌を抜くことにした。K は、ハリスホークは頭と足が別々の生き物といった感じであるため、頭では行きたいと思っいても足が固くてはずれないということが起こる事もあると言っていた。P 個体も足が固く、指が折れないか心配になるほどかなり力を入れないと外れないため、行きたくても足が踏み出せないという場合が多いのではないかと感じた(12. 8. 27)。

訓練において、攻撃や逃避もせずただ筆者の拳を見つめ、乗って来るまでにかかった時間がその鷹との距離感であるような感覚があった。鷹の反応を訓練初期から順序で表すと、餌があっても拳に乗らない、餌があつたら乗るがなければ乗らない、餌がなくても乗る、といった段階を経ることとなる。

2 年目

訓練をしようといつものように小屋の扉を開けて中に入ると、筆者とは反対方向に逃げたと思いきや、いきなりこちらに振り向いて奥から走ってきて、自ら筆者の拳に飛び乗ってきた。筆者には、P 個体が突然何かを思い出したかのように見えた(13. 9. 27)。

その日は時間がなかったため、小屋内にあるパーチにつないだまま P 個体の届く範囲に体重計を置いた。すると体重計を見て姿勢を低くし、その態勢のまま、まるで乗っていいものかどうかを迷っているかのように体重計と筆者の顔を交互に見てきた。すぐには体重計に乗らなかったため、筆者から拳を差し出すと、一度拳に乗ってすぐに自分から体重計に乗った。後日、再びパーチにつないだ状態で体重計を P 個体の側に置くと、今度は迷うことなく自分から体重計に飛び乗った。そこから筆者を見るとまたパーチに飛んで戻り、その後も再び自ら体重計に飛び乗ってこちらの様子を伺う行為を繰り返した。この行動に対して筆者は、まだ筆者が拳を差し出すそぶりを見せていないため、筆者が拳を差し出すか餌をあげるまで P 個体は筆者の反応を見ながら同じ行動を繰り返すことで、この行為は正しいのか間違っているのかを判断しているのではないかと感じた(13. 10. 30)。

2 年目になると、1 年目よりも拳に乗ってくるまでにかかる時間が短いことが判明した。これは、1 年目の初対面の人であるか、2 年目になって関わりがなくてもいつも目にしてきた人であるかの違い、もしくは数カ月前の記憶が思い出されたからではないかと考えられる。また、体重計の事例では、「体重計に乗る」という行為は毎日繰り返し行っているにもかかわらず、飛ぶ姿勢のまま体重計と筆者の顔を交互に見るといふ行動が見られた。

まとめ

1 年目のようにひたすらパニックを起こして逃げるのではなく、一度離れたところまで移動した後、遠くから様子を見て状況を把握し、そのうえで拳に乗るといふ冷静な判断ができるという差には、初対面の人かそうでないか、もしくは鷹にも「思い出す」といふことができるということが関係しているのではないかと考えられる。体重計の事例から、「パーチ→拳→体重計」といった通常行っている順番ではなく、「パーチ→体重計」など一つ手順を飛ばすことは鷹にとっては応用が利きにくく、迷いやすいということが分かった。同時に、筆者が鷹から感じた葛藤や迷いは、筆者が無意識のうちに感じていた鷹の対象物を見つめる時間の長さや視線の運びによって判断していたということが分かった。後日、同じ状況でそばに体重計を置くと迷うことなく体重計に飛び乗り、筆者の方を見て反応がなければまたパーチに戻るといふ行動を繰り返し行っていたため、鷹は相手の反応を見て自分の行動を決めることもできるといふことが考えられる。

3-8 疲労

この項目では、野生の鷹と訓練された鷹の体力面での違いや、鷹の損得に対する学習能力を利用してどのように鷹の行動を修正していくのかを見ていく。そして、一般的に飼われている犬の散歩と、犬の散歩のように毎日行う鷹の訓練に対する筆者の心理的な捉え方の違いを説明していく。

1 年目

訓練後、I 個体は口を大きく開けて息遣いが聞こえるほど息が荒く、羽を下に降ろした状態であった。すぐく疲れている、もしくは暑いのではないかと判断し、K にこのような状態のときにはたくさん水を飲ませた方が良くと教えてもらった(12. 8. 31)。

外に置いてあるパーチや小屋の屋根(高さ 3 メートル程)への渡りを 3~4 回繰り返すと、屋根へ向けて飛ばしても、屋根に上がる手前ですぐ地面に降りてしまう。このような反応のときには疲れている、もしくはさぼっていると判断した(12. 9. 4)。

その日の I 個体は屋根へ向けて飛ばし止まること

はできて、呼ぶと一直線に拳に来るのではなく、一度地面に着地して休んでからまた呼んだら来るといった行動であった。これが2~3回続いた。この行動は体力不足からくる疲労、もしくは一度地面へ降りて休んでも餌がもらえるなら手を抜こうといったさぼり、または拳に止まるのが怖い、スピードダウンするのが下手といった要因が考えられる。そのため、この行動を一直線で拳まで飛んで来るように教え直すには、I 個体が途中で地面に着地したらそこからもっと離れて「途中で地面に降りることは損」ということを教えるべきであると K に教わった(12.9.5)。

I 個体の訓練、以前より屋根の上へ行くようにはなったがやはり戻ってくるときに一度地面に着地してからこちらへ来る。小屋の近くから飛ばすと屋根に止まってくれるが、小屋からの距離が離れるとすぐ地面に着地してしまう(12.9.6)。

その日は雨だったため、I 個体にフードをかぶせて雨がやむまで室内で据えた。雨が降り止んだので渡りの訓練を開始。屋根から拳に戻る途中、やはり一度地面に降りてしまったため、少し離れて呼ぶ行為を繰り返した。この行動を何度も行うことで、I 個体は次第に屋根から拳まで一直線で来るようになった(12.9.8)。

P 個体の訓練時、止まっていた木からこちらに飛んで来る際、途中で一度地面に降りてから筆者の元まで歩いて戻ってきた。次第にさぼることを覚えてきてしまったようだ(12.10.2)。

野生の鷹は呼吸が乱れるほど飛ぶ機会は少なく、獲物を獲る過程においても自分が無理だと判断した獲物を無理に追うことはない。疲労した鷹の姿を見ることは、訓練している鷹でしか見られない特徴であると言える。したがって、鷹にとって不必要な体力の消耗を避けることは自然であるため、地面に降りるといった行動は人間がさぼったと判断しているだけである。この「さぼり」を鷹にさせないためには、「どのように行動した方が得か」ということを覚えさせなければならない。よって、筆者がより遠くへ移動することで、鷹にとって無駄な体力の消費を避けたいという行動を利用し、鷹にとっての不利な状況を覚えさせ、一直線に来る方が得だと判断させ

る。これができれば、鷹の行動は修正されるのである。

2 年目

この日は公園に小さい子もいたが、気にせずに飛んでくれる。P 個体は人工物よりも自然物の方を好んで止まっているように見える。そのため、周囲に止まりやすい人工物があるにもかかわらず木ばかりを狙って飛んでいく。5~6回飛ばすだけで嘴を薄く開け、「ハアハア」という息遣いが聞こえるほど呼吸が荒くなった(13.9.10)。

公園で10往復飛ばすと嘴をうっすら開けて荒い呼吸をするが、5~10分休むとまた嘴を閉じて元の状態に戻る。4日前までは5~6回で息が上がっていたので、少しは体力がついたのではないかと思われた(13.9.14)。

訓練の最後の方になると、飛ばしてもすぐ目の前の地面に降りるか、餌で呼んでも反応が遅く、戻ってくるまでに時間がかかる。このように餌に対しての反応が鈍くなると鷹は筆者に集中できなくなり、飛ばしにくくなる。そのため、疲労もしくは空腹が満たされてこちらからの反応に鈍くなったら、鷹が何か気に取られたり、驚いて逃げてしまう前に訓練を中断するように心がけている(13.10.6)。

強風で上手く木に止まれずに公園(約50メートル×50メートル)を一周して帰ってきた時には口を大きく開け、息が上がっていた(13.10.26)。

筆者は、餌合子で呼ぶ前に鷹がこちらへ来ると「空腹」、呼んだら来る状態だと常にこちらの様子を見て集中している状態である「待機」、呼んでも来ないと「休憩」または「餌への欲求が薄れた」と判断している。また、鷹の嘴の開け具合は、筆者が鷹にどのくらいの疲労が溜まっているのかという判断基準になっている。鷹の疲労具合をみることで、どの程度の体力がついたのかがある程度把握できるようになった。

まとめ

鷹が疲労した姿を他者に見せることは致命的であるため、人間が自然界でその姿を見ることはまずない。しかし、訓練している鷹は強制的に飛ばして体

力作りをしているため、疲労した姿を見ることが出来る。疲労が溜まれば呼んでもすぐには戻ってはこず、木に止まったまま体力が回復するまで休むか、地面に降りて「手を抜く」「さぼる」といった行動をとる。この「さぼり」をさせないために鷹の学習能力を利用し、何が得かを教えていく必要がある。この作業を繰り返すことで、鷹の行動を人間にとって都合のいいように修正していくのである。また、鷹は犬のように忠誠心ではなく餌を使ってコントロールし、訓練を行っている。そのため、疲労するなどして餌に対しての反応が鈍くなると、鷹が筆者に対して集中できず逃げてしまう可能性も生じてくるため、鷹の反応を注意深く見ながら日々の訓練をしなければならぬという緊張感を常に抱く必要がある。

3-9 遊び

最後の項目では、動物の遊ぶという行動の裏に隠された意味や、人間が動物の行動を「遊び」だと思いたい心境を見ていく。

1 年目

「遊び」を思わせる行動は見受けられなかった。

2 年目

室内で据えるとすぐに羽根を膨らませて丸くなり大人しく拳に止まっているが、30分程経過すると筆者の肩や机に飛び移り、再び自分から筆者の拳に戻ってくるという行動が見られた。また、餌がなくても室内だと呼べばこちらへ来てくれるようになった(13. 10. 11)。

室内で据えると、筆者が椅子に座った後すぐに片足を上げる。その後は筆者の肩に飛び乗ったり、拳に戻ったりと動き始める。肩、拳、肩、拳と交互に飛び乗って遊ぶような落ち着きのない行動が見られた。P 個体が肩に乗ったときに立ちあがり左腕を水平に伸ばすと、P 個体が肩から拳へ向けて横歩きをしながら元の場所に戻ってきた。このように筆者の身体のどこに止まることにも慣れ、例え首に止まったとしても P 個体が爪を立てることはなくなった。落ち着きがなくなったとも捉えられるが、緊張して全く動けなかったときと比べて活発になったことが筆者には嬉しく思えた(13. 10. 16)。

以前、野生の鷹も松かさ玩具にして遊ぶときがあるということを知っていたため、筆者は P 個体の遊ぶ姿を見たい、ずっと小屋に一人だと暇だろうと思い松かさを持って帰った。その松かさを P 個体に見せると、松かさを見ながらしゃがんでかまえ、投げると飛びついた。そのまま片足で松かさを掴んだが、餌ではないと分かったようでじっと見つめたままであった。筆者の目には、餌でないが足を放すと取られると思っているのか、握った松かさを見つめたままどうしようかと考えているように見えた。そして、筆者に松かさを取られるたくない判断したのか、部屋の隅まで持って行き、松かさを身体で隠して筆者に背を向けた。筆者は、初めて見た松かさに対して P 個体がこんなにも反応があるとは思っておらず、餌やルアーなどの擬似餌以外にも興奮して掴み、隠す行為をするのは初めて見た(13. 10. 18)。

P 個体にあげた松かさが少し崩れており、最初に置いた場所から移動していたのを発見した。P 個体の遊ぶ姿は見えていないが、足で掴み噛みちぎって遊んでいたのではないかと思われる(13. 10. 19)。

P 個体の爪の先を指で触ると、P 個体は筆者の指をじっと見つめながら足を握りしめてきた。相変わらず室内でしばらく据えた後は、拳、肩、椅子、拳と様々な場所に止まって移動する(13. 10. 25)。

筆者の肩や背に飛び乗り、また拳に戻ってくるという行動は餌を見せて覚えさせた訳ではなく、あるときから P 個体が自発的にやり始めた行動である。そのためこの行為は、P 個体が室内で据えられることに慣れて精神的な余裕ができ、筆者を信頼し始めたうえでの行動ではないかと思われる。松かさの事例では、P 個体が餌以外のモノにも執着する姿を見ることができた。同時に、P 個体に対して「ずっと小屋に一人だと暇だろう」と判断した筆者の感情は、明らかに自分の感情を P 個体に投影させたものであるということが言える。

まとめ

肩や背に止まる事例では、この行為は P 個体が筆者に慣れて精神的な余裕がでてきたからだと筆者は思っていた。しかし、この時期は筆者自身が P 個体

から攻撃されるという恐怖や不安が軽減し始めていたときでもある。そのため、このような筆者の精神的な余裕から、P 個体の足に付いている紐を無意識に緩め、以前よりも自由に動けるようにしたことがきっかけになったのではないかと考えられる。松かさの事例では、鷹は餌以外のモノにも執着し、自分の所有物といったような感覚があること、そして筆者が見ていないときに自分から松かさで遊ぶという行為をしていたことから、筆者とは関わりのない P 個体だけの世界があるということを思わせる行動を見ることができた。また、「遊ぶ」という行為は仲間内にしか見せない行為である。そのため、松かさに対する鷹の反応次第で、その鷹はペットに近い状態であるか、またはまだ人間に対して全ての警戒を解いたわけではないかが分かる。

筆者は鷹が遊ぶ姿を見てみたいという気持ちはあったが、鷹を完全にペット化させ、野生の本能を失わせたくはないという矛盾を抱えていた。そのため、P 個体が「人目を隠れて」遊んでいたという事実、完全に人間に対して油断しきっていたわけではないことを知り嬉しくもあった。しかし実際は、鷹が松かさを掴んだり噛みちぎるといった行為は、狩りの練習の一端であるかもしれない。そうであれば、P 個体は筆者の知らないところで狩りの練習をし、自ら学んでいく姿勢が P 個体の「主体性」を育てているのではないかと考えられる。また、「遊び」だと思ふ筆者の心理には、鷹を人間と共に遊ぶことができる犬や、暇なときに遊ぶ自分自身と同様のものとして見ているという根底がある。このように自分と同様のものと感じる部分から、相手との近い距離や愛着が生じやすいのだと言える。

第 4 章 分析

伝統文化として鷹を飼い、共に狩りを行う人々がいる一方で、人に慣れやすいハリスホークの流通で鷹をペットとして側に置く人も増えてきている。第 2 章では、同じ猛禽であっても、鷹の種類や人々の立場によって鷹に対する見方や考え方、接し方に大きく差があることに注目した。第 3 章においては、筆者と鷹の 2 年間の関わりを見ていくなかで、鷹の行動を感情として受け取ることにより、筆者は鷹を

理解しようとしていたこと。そして、鷹が「慣れ」というプロセスを経るにつれて筆者は P 個体に愛着を感じるようになり、同時に鷹へのリスクという面から次第に失われていく「狩り」への積極性に注目した。

この章では、筆者に対して特に攻撃的で、関わりをもつことを否定する行動ばかりであった P 個体みの変化に注目し、「慣れ」と「狩り」という相反するプロセスに分けて分析していく。そのうえで、鷹の行動の変化そして筆者の心境の変化をふまえて、人が動物を理解し関係を築こうとする理由を、繋がり築くことに執着する人間の愛着やコミュニケーションの観点からみていく。

4-1 慣れのプロセス

攻撃行動に関しては、1 年目では筆者が手を動かすだけで手に穴が開くほど攻撃してきたにもかかわらず、2 年目になると今まで P 個体が嫌がっていた胸や足、頭を触るなどの行為を何度繰り返しても攻撃してくることはなくなった。それどころか、筆者の手を嘴で軽く挟み、その行動をやめるように要求する「加減をした行動」をするようになった。このような行動から、1 年目は拒否していた筆者の行動に対して、2 年目では P 個体自身が筆者の「触る」という行動を理解し、許容したのだということが分かる。

鷹の逃避行動では、カラスなどの対象から逃避する場合、単純にその対象から離れた場所へ移動する場合と、鷹にとっての安全地帯となる場所に逃避する場合の 2 種類あることが分かった。この行動は、鷹にとって少なくともカラスと筆者を比べると、筆者の方が拒む対象ではないことを意味していると言える。

また、初期訓練から 1 カ月程経過して初めて緊張を緩めた仕草ではないかと思われる行動を見ることができた。鷹にとって“初めて”という場面でも落ち着いた状態のときもあったため、鷹は自分にとって影響が少ない環境であると判断できたときにリラックスしているのではないかと考える。よって、いかに早く鷹が安心できる条件を満たすかが、人間に対する鷹の反応や訓練の進行具合に影響してくると言える。

そして鷹からの要求だと思われる行動は、今まで筆者からの一方通行な関わり方だと思っていた関係に大きな変化をもたらした。2年目から急に鳴き始めた鼻で鳴く声は、筆者がいるときにしか出さない。そのため、この鳴き声の発生はP個体のなかで筆者に対する見方に少なからず変化が現れたということであり、人間である筆者と関わりを持とうとする意思が生まれ始めたことを意味しているのではないかと考えられる。また、餌合子をつついたり、松かさの前に立って筆者の行動を阻む行為や近づいて雑巾を見つめるなど自分から筆者に近づく、または興味を示す行動を頻繁にとるようになった。そして鷹にとって自分の意思や要求を伝える方法が、攻撃以外のものへと変化していったのである。

葛藤・迷いの項目では、P個体が初めて筆者と会ったときはパニックを起こして逃げ回る状態であったが、2年目になると訓練初日であっても一度離れたところまで移動した後、遠くから観察し、そのうえで恐る恐る筆者の拳に乗るという、状況を把握したうえで判断して行動に移すという様子を見ることができた。この差は、「鳥は記憶し、思い出す」能力があることで生まれるのではないかと考えられる。よって、1年目より2年目、2年目よりも3年目の訓練が楽になり、徐々に負担が軽減していくのである。

これらのP個体の行動の変化から、関わる度に筆者の行動を把握し、次第に慣れていくことで、P個体は鷹としての攻撃性や警戒心が薄れていく代わりに筆者との生活に適応していったことが分かる。

4-2 狩りのプロセス

人の飼育下にある鷹を鷹としてあるようにするためには、定期的に狩りをさせ、生きた獲物を捕獲し、その獲物をさばかなければならない。そのために筆者は、今までに十羽近くの鳥たちをP個体の訓練のためにさばき、P個体に獲物を捕らえる経験を積ませた。しかし、いざ本番となると獲物を捕らえることが全くできない。訓練では、鷹の自信につながるよう必ず捕らえられるように獲物を紐で結ぶなどしてハンデを与える。すると、相手が逃げることができないことを知っているためか、生餌の訓練では時折P個体は手を抜く。いつもの訓練程度のスピードしか出さず、本気で獲物を捕らえようというように

は見えないのである。その状態で狩りに出かけると、獲物は命がかかっているため本気で逃げ、P個体はいつもそのスピードについていくことができずに獲物を捕らえることなく終わってしまう。獲物が獲れないと鷹は自信を失くし、かなりの体力を消耗する狩りをわざわざしなくても餌が食べられると思われるしまうと、さらに狩りへの積極性に影響がでる可能性がある」とKは言っていた。しかし、狩りを成功させるには鷹自身の技術の向上だけでなく、狩りをする人間も鷹と共に経験を積み、成長していく必要がある。鷹が獲物を追いたくなるように餌の量を調整して腹を空かせておくなどの工夫や、P個体よりも先に獲物を見つけて準備をしておいたり、P個体の飛ぶタイミングに合わせて腕で押し出しスピードをつけるなど、筆者がP個体の足手まといにならないように鷹のサポートとしての力を発揮できるかどうかには狩りの成功はかかっていると言える。したがって、鷹と人どちらかだけの技術では狩りは成功しないのである。また、狩りをさせるということは、より野生に近い状態の鷹にすることである。これは「慣れ」のプロセスとは異なった過程を経なければならぬ。単に鷹を人に慣らすだけでよいのであれば、ペットのように毎日鷹と関わり、人に触らせ、訓練など行かずに鋭い爪も嘴も全て切って室内で共に過ごせばよい。しかし、狩りを行うのであれば鷹に体力と筋力をつけさせるために毎日訓練を行い、どんな環境でも通常通り飛ぶことができるように慣れさせ、爪もとがらせたままの状態にしておき、獲物に向かっていく本能を保たせ続けなければならない。これは人間に対しての攻撃性も高い状態のまま飼うということである。鷹と関わりすぎると愛着が湧いてしまい、鷹も楽をして餌が貰えるにこしたことはないため人に慣れ、頼って甘えてしまう状態にならないよう、ある程度の距離を置いて突き放した関わり方を必要とする。

そして狩りをするうえで必ず考えなければならないのは人にとってのリスクと、鷹にとってのリスクである。まず人間にとってのリスクは、狩りをするために狩猟許可区域の把握や狩猟可能鳥獣の把握などの負担や努力も必要であるが、何より鷹が狩りをしている最中にそのまま逃げてしまう可能性があるということである。P個体は獲物を捕獲するとその

まま持ち逃げするという鷹の本能が抜け切れずにいたため、ルアーに羽根を付けてその場で羽根をむしり始めるという行為を覚えさせなければならなかった。獲物を持ち逃げし、その先で腹いっぱい食べさせてしまうと鷹を餌で呼ぶことはかなり難しくなる。そのため、鷹が逃げ込んだ場所を突き止めても、餌で呼ぶことができるほど鷹が空腹になるのを待たなければならなくなる。そしてもう一つは、獲物を追いかけた(または取り逃がした)あと、遠くまで獲物を追いつけた結果そのまま見失ってしまうなどが原因である。これを防ぐために、狩りの際には必ず鷹に発信機を装着する必要がある。そして鷹にとってのリスクは、怪我や死亡事故である。獲物から受ける怪我もあれば、鷹の獲物に対する欲求が強いばかりに水深が深い場所で獲物を捕獲し、そのまま水に引きずり込まれるなどの死亡事故もある。また、場所を変えればいいのだが、道路近くで狩りをすると交通事故にあう可能性もあるかもしれないことを頭に入れておかなければならない。以上のリスクをふまえたうえで鷹狩りを行わなければならない。

一方遊びに関しては、遊びだと思われる行動が見え始めたのは2年目からであるため、これらの行動はある程度筆者との関係が安定的になり、P 個体も筆者の行動や反応などを理解したうえで行っている行動であると思われる。筆者が見ていないときに松かさで遊ぶという行動は、鷹にとって狩りの練習の一端であるようにも受け取れる。そのため、誰かに強制されたのではなく自ら進んで行動し、学んだ結果が狩りに活かされるという P 個体の「主体性」を育てているのではないかと考えられる。このように、筆者との関係とは離れた P 個体だけの外界との関わりや世界で、P 個体は日々何かを学び成長している。筆者に慣れていく反面、筆者を気に掛けなければならないという縛りから解放され、自由に行動することができる余裕がでてきたことで、次第に P 個体の行動は筆者からの自立へと繋がっていくのだと考えられる。

4-3 捉え方の変化

P 個体の筆者に対する攻撃頻度が減少したことについて、筆者は付き合いが長くなったことで P 個体が筆者に慣れ、それが要因であると思っていた。し

かし、P 個体が筆者に慣れたことだけが原因なのではなく、筆者自身が経験を積むことで鷹の扱いに慣れ、無意識のうちに前もって鷹が不快に感じる行動を察知し、P 個体の攻撃行動を減少させていった要因もあると言える。同時に、P 個体が筆者の行動に慣れていくことで「近づく」、「触る」といった接触が徐々に可能になっていった。この鷹の攻撃頻度の減少と接触が可能であるというふたつの事実から、筆者は「自分は他人よりも P 個体に受け入れられ、少しは信頼を得ることができたのではないか」と思うようになり始めたのである。このように、自分はこの個体に許された特別な存在になれたという認識が鷹に対しての愛着が湧き始めるきっかけとなった。

鷹がいくつかの対象を比較し選択する際、鷹にとって許容できると判断する側に認識されることが信頼を得ていると言えるのではないかと筆者は感じた。しかし、餌など鷹の行動を誘発しやすいモノを使えば容易に選択結果を変えることができるため、この選択結果は対象によって様々であると言える。鷹には犬のように飼い主自身や飼い主の指示を一番に優先すべきことであると教えることが非常に困難であるため、必ず筆者を選択し、優先するわけではないと言える。

さらに、筆者にとって今までは理解できなかった P 個体の行動や身体変化を、最初は K から教えられたからであったとしても、それらの行動を「感情」として意味付けをすることで、「P 個体」という個別の存在として認識するようになっていった。このように感情を重視して動物を見るという部分に、筆者の鷹をペットのような愛着の対象として見ている感覚が根底にあると言える。

逃避行動では、どこかへ逃避する場合と安全基地となる場所に逃避する場合の2種類あることが分かった。これに関して、以前は鷹にとっては逃避の対象であった筆者が、鷹にとっての安全地帯へと変化したことが鷹からの歩み寄りを感じる要因になったと思っていた。しかし、カラスなどから逃げて筆者の方へと P 個体が飛んできたことに関して、P 個体は訓練を続行していた状態であったため筆者の元へと戻ってきただけという可能性も考えられる。ただ、カラスが近くにいると木に止まり続ける時間が極端に短くなり、筆者の近くまで飛んで来るとカラスが

逃げることから、まわりついているカラスを避けるために筆者の存在を利用しているとも考えられる。

P 個体が筆者に緊張を緩めている姿を見せ始めた頃、攻撃しようと思えばすぐにできる程かなり紐が緩い状態であるにもかかわらず、筆者がいくら P 個体の頭や身体、足を触っても攻撃してくることはなかった。この反応に対して筆者は、「触れる」という筆者の愛情表現を鷹に受け入れてもらえたと感じると同時に、筆者にとっての P 個体が攻撃されるという恐怖を抱いていた対象から、身体に触らせてくれる可愛い存在という認識になることで、次第に愛着が湧く対象へと変化していった。このように、相手に対して「触れる」ことができたり、鷹がリラックスして丸くなった状態など相手の反応を見て「可愛い」と思うことが、愛着の対象へと変化する要因になりえると言える。また、P 個体が筆者の指示を聞いてくれたという事例では、P 個体が行動したきっかけが何であれ、筆者が「P 個体が指示を聞いてくれた」ということ自体に、相手の行動をコントロールし、自分の思うように動かしてみたいという家畜に対する感情にも似た要素をもって P 個体を見ている側面も存在していると言える。

筆者はカラスが苦手だと思っていた P 個体が、カラスに対して攻撃的な対応をしたことに喜びを感じていた。この感情は、避けたいと思う行動に対して挑戦したという P 個体の成長に対しての親心と、「自分が育ててきた」という P 個体の成果に自身を投影させた現象によって生じていると言える。この感情は「自分が育てた」という気持ちが強ければ強いほど敏感になりやすいと考えられる。しかし、筆者はこれらの感情に加え、「これでカラスにも向かうようになれば狩りの対象が増える」という気持ちもまた持ち合わせていた。この部分に、まだ鷹を狩る側の動物として見ている筆者の視点がうかがえる。

筆者が P 個体の鳴き声を会話のように感じたことや P 個体からの要求だと判断した行動に関して、例えば筆者の勝手な解釈であったとしても、今まで鷹との関わりが接触など筆者からの一方的なものだけであったものが、P 個体から筆者に関わりを持つようになってくれたように感じることであったという変化そのものに、相手との距離を近くに感じる大きな要因がある。

遊びについて考えると、筆者は P 個体が遊び始めたのは、P 個体が筆者に慣れて精神的な余裕ができたからだと思っていたが、実際には筆者が無意識のうちに鷹の紐を緩めていたからなど、自身の鷹に対する信頼と精神的な余裕も関係していた。また、玩具として与えた松かさに対する鷹の反応次第でその鷹はペットに近い状態であるか、まだ人間に対して完全に警戒を解いたわけではないかが分かると筆者は思った。筆者は P 個体が「人目を隠れて」遊んでいたという事実から完全に人間に対して油断しきっているわけではないことを見だし嬉しくもあった。人間には「遊び」だと思えるような動物の行動でも、動物にとってはその遊びの中から学ぶことは多くある。実際、鷹が松かさを掴んだり噛みちぎるという行為は、狩りの練習の一端であったのかもしれない。したがって、この行為を「遊び」だと思う筆者の心理には、P 個体の成長を気にかけるというよりはただ可愛い存在として見ており、鷹としてはなく自分自身と同じ目線、同じように感じているものだとして見ているという根底がある。

最後に狩りについて述べると、P 個体が鷹本来の狩りの本能を持ち続けるには定期的に生きた獲物を獲らせ、その獲物をさばくという精神的な負担を負わなければならなかった。当初は生きた獲物の温かさ、心臓の鼓動、次第に堅くなっていく身体を手で感じ、申し訳なさとしさ、命をいただくことのあるありがたさを痛感した。鷹を生かすだけで良いのであれば、わざわざ負担になることをしなくても良いのにあえてそこを受け止めるのは、P 個体を鷹である以上「鷹としての本能を保ったまま」でいさせたいという筆者の思いがあったからである。そのためにやらなければならないことは「狩り」であり、鷹を鷹としてあらしめる最も重要な要素である。そのため、P 個体が獲物を捕獲した瞬間を目の当たりにすると今までの努力が報われたような、筆者が今まで施してきたやり方で良かったのだという、鷹に認められたような気持ちになるのである。

以上の分析から、筆者は P 個体をペットのような可愛らしい存在として接したいという思いを抱いている反面、鷹の攻撃性に対する恐れや、いつ自分から離れていくかも分からないという不安を常に抱くことで、鷹をペットとは異なる存在として一線を引

いた捉え方をしていることが分かった。

第5章 考察

猛禽類の中で群れを形成する特性をもつハリスホークの普及をきっかけに、今まで狩りとしてしか用いられていなかった鷹がペットのような存在としても扱われ始めた。これにより、鷹をひたすら人に慣れさせることでペットとする人もいれば、鷹の本能を維持した状態を望む人もおり、人と鷹との関係は実に多様であるということが分かった。この関係は、特に野生の本能をもちつつ人に慣れるというハリスホークに見受けられる。このような、人間との距離がある野生と、人間の伴侶としても扱われるペットという両極に位置する対応や考え方のなかで、人は鷹との関係を常に流動させながら構築していると言える。よって鷹は、関わる人間が鷹をどのような存在として捉え、鷹に何を求めるかで常に変化するニュートラルな存在なのである。

5-1 筆者と鷹の関係

筆者は幼い頃から猛禽に魅せられ、鷹を飛ばすという行為そのものに憧れを抱いていた。しかし、実際に取り組み、P 個体という鷹から攻撃され拒否される日々が続くことで、当初強い恐怖を抱くようになった。同時に自分自身の情けなさ、悔しさを感じることで、「絶対にこの鷹を調教してやる」という強い意思を抱くようになった。このときから筆者は P 個体に対して「ライバル」という他の個体とは異なった特別な感情を抱くようになり、ただひとつの対象として P 個体を認知し始めていた。訓練が進み、P 個体が筆者に慣れてくることで次第に恐怖は薄れていき、憧れから恐怖、そして可愛さへと P 個体に対する感情は日々変化していった。それでも常に心がけていたことは「狩りをする」という鷹の本能へのこだわりである。

動物が好きで触れることを自分の愛情表現とする筆者は、なぜ鷹を完全に人に懐いた状態であるペットにはさせず、野生の本能をという部分に執着して狩りを行うのか。それは、野生を色濃く残している鷹に対する誇りや鷹本来の生き方に近い状態を保たせてあげたいという自己満足、そして調教が困難な

鷹と日々関わり、共に狩りを行うまでになることで、鷹を自らの努力そのものであるとして捉えているからであると言える。

単に鷹を飼うことで猛禽の様々な特徴・表情を知り、鷹の可能性をもっと試したいという心境から鷹を訓練させ始めたのであれば、それは犬に様々な芸を覚えさせたいという心境に近いものがある。これができるなら次は難しいことにチャレンジしてみようといったような欲求は、人とペットとの関係のなかで行われる。しかし、注意すべきは人に慣れやすいと言われるハリスホークでさえ、もとの気質は鷹そのものであり、人との関わりを継続し続けなければ「慣れ」は薄れていく。一方で、もともと狩りを行うことを目的として鷹と接している人は考え方から異なる。鷹と関わりながら徐々に可能性を広げていくのではなく、最初から鷹の(特に狩りの)本能を利用し、その野性味溢れる状態をいかに残した状態で人と行動できるようにするかという、人との微妙な距離を保つことが重要となるのである。

よって筆者と鷹との関係は固定されるものではなく、常に揺れ動いている流動的で変化に富んだ関係性であると言える。

5-2 鷹の感情

動物を人間のように感情があるものとして捉える考え方は、世界各国、特に自然や動物世界が身近に存在する地域において色濃く残っている。しかし動物の人間的な面についての考え方は比喩的な表現と見なされており、動物に思考や精神があるとするのは人の持つ思考や精神の拡張に過ぎないと考えられてきた。しかしバーバーは、鳥にも時間の流れが存在し、はっきりとした個性があり、それぞれの性格をもつ独自の個体である、と言う[バーバー 2002]。

人はコミュニケーションをとる際、相手の視線や身体特徴、動作などの行動を知覚することで相手の感情を敏感に感じ取っている。動物に対しても同様に、視線や動き、鳴き声などあらゆる情報を読み取ることで動物の心理状態を把握しようとする。人間は、動物から読み取ったこれらの行動に対してそれぞれに意味を持たせ、解釈し、コミュニケーションとして認知する。したがって、動物の行動に対する捉え方は、様々な人の価値観や、人間が動物の反応

をどう捉えたいかという期待によって左右され、その解釈は人によって異なる意味をもつ。

しかし、日々鷹と関わることで経験を積み重ね、その情報をお互いに共有することで解釈の基礎に十分な共通性をもたらし、裏付けされた確かな感情表現もある。それは代々鷹匠たちから受け継がれてきた、鷹の行動を解釈したものである。2年間鷹と共に過ごしてきた筆者でさえも、未だに何を意図するのか分からない行動もあるため、鷹の反応の全てを把握し、感情として受け取っているわけではない。鷹と出会った当時は、鷹の動きや鳴き声、反応などに新しい発見がある度、Kに「この行動は何を意味しているのか」と聞くことで知識を貯め、確かにそう受け取れると判断し、理解してきた。そのため、鷹の行動と感情とを関連付けて考える術は、今まで鷹との関わりを築いてきた先代たちから口頭で伝えられてきた判断基準と、自分自身が経験するなかで感じ取った新しい捉え方を融合させ、これらの知識を互いに共有しながら妥当なものであるかどうかを見極め増やしていくことで、より洗練された解釈となって受け継がれていくのである。

5-3 信頼関係を築く

「鷹を信用しろ」。これは筆者が鷹をフリー(紐を外した)状態にして飛ばすことに不安を抱き、訓練が先に進まなかったときにKから言われた言葉である。鷹に対していつ逃げるかも分からないという気持ちを常に抱いておけと言われ続けた反面、鷹を信用しろとも言う。筆者はこのとき、Kが何をもって鷹をもうフリーの状態にしてもよいと判断しているのかが全く分からなかった。何度も練習し、例えばちゃんと鷹が返ってくる状態になっていたとしても紐がない状態で鷹を飛ばすことを想像すると、鷹の意思を尊重しての訓練となるため、もし鷹がどこかへ飛んで逃げようとしたときに行動を制限し、コントロールすることができなくなることが不安でならなかった。しかし、いざ紐を取り外して思い切って鷹をフリーの状態にすると、鷹は今まで通り何も変わった様子もなく、いつもの訓練のように筆者の元へと戻ってきた。あっけなかった。だが、今までの積み重ねを思い起こすと、言いようのない満足感と達成感があった。

鷹の調教が2年目に入り、全て一人で行動し、判断しなければならぬ状況に立たされることで、不安要素は全て取り除こうと思った。自分の満足がいくまで訓練を続け、万が一逃げたときに備えて、一日中探しまわれるように時間を調整し、警察や動物病院、保健所などあらゆる動物関連の施設の電話番号を調べて常に持ち歩いていた。このように、自分ができる万全の状態を整えたうえで鷹をフリーの状態にしたため、1年目のような不安は全くなく、むしろ絶対に戻って来るという自信があった。これを信頼関係と呼べるのかは分からないが、お互いの関係に不安要素がないことを今自分にできるベストな状態だと判断している。

ペットでも野生動物でもない曖昧な関係でありながら、相手の意思に任せて大丈夫だと思える何か。そこにはお互いが共に経験し、共有してきた過去の積み重ねによって成り立つ関係があるからこそ裏付けされる信頼関係であると言える。

5-4 信頼の先へ

これまで述べてきたように、筆者は鷹と2年間行動を共にすることで、今では信頼関係とも言える鷹との安定した関係を築くことができ、数回ではあるが当初の目的であった鷹狩りも行うことができた。筆者は鷹に対して「鷹は狩りを行う捕食者であり、気高く自由に羽ばたいているものだ」というイメージを持っていた。そのため、鷹を飼った以上檻に入れたままの状態にしておいたり、ひたすら人に懐かせてインコやオウムのように扱うのではなく、例え飼育下にある鷹だとしても本来の姿に近い状態のままにさせたいという思いで鷹狩りに至るまでに全力を注いできた。しかし、思い返すとP個体にとっては、もしかしたら餌を貰えるうえ、身の安全を保障されているだけで狩りなどしなくても十分に満足だったのかもしれない。それでも鷹の「らしさ」にこだわった筆者の身勝手さは、鷹への愛着が形成されていくことでもうひとつのエゴとなり、筆者の中でふたつの感情が葛藤することとなった。

その葛藤とは、狩りを行ううえで避けては通れない怪我や事故などのリスクである。P個体は獲物を捕獲した際に怪我をすることが多かったため、今まで伝え聞いていた怪我や死亡事故に対して他人事の

ようには思えなかった。だが、この失敗した経験は P 個体が獲物を捕獲する技術を学んだと思えば、P 個体にとってはこの怪我も次の狩りの成功につながる良い経験になったと捉えることができる。しかし、P 個体に狩りや成長を望んだのは筆者であるにもかかわらず P 個体が狩りで怪我をしたとなると、筆者が一方的に鷹らしさを押し付けるあまり怪我をさせてしまったのだと狩りをさせた自分自身に責任を感じ、その度に狩りへの意欲が失われていった。そのため、獲物を取り逃がしたときは獲れなかった悔しさよりも、P 個体が無事に戻ってきたという安心感の方が次第に強くなっていったのである。

しかし、狩りをする際に受ける怪我などのリスクは、野生下にある鷹でも同じである。狩りはトライアンドエラーを繰り返すことで経験を積み、技術を向上させていくため、たとえ狩りのときに怪我をしたとしてもそれは筆者のせいではなく、鷹にとっては自分の意思で行動した結果失敗したと思うだけかもしれない。筆者が鷹本来の姿を望む一方で、その失敗を恐れて狩りをさせないのは、むしろ筆者が P 個体の成長を阻んでいることと同じなのである。

このことを理解したうえでなお、なるべく怪我をする確立が低い場所でのみ狩りをさせたいと思うのは、鷹はどうあるべきかという視点で鷹の成長を望んでいるからである。その一方で、自分の眼が届く範囲内の自由な行動は認めるが、見えていないところで危険にさらされたり、自分の不注意で怪我をさせたくないという慣れによって生まれた愛着による葛藤があるからである。すなわち、子どものあるべき姿というものを分かっているが、手が離せず過保護になってしまう親のような気持ちの葛藤を P 個体に対しても抱いていると言える。その結果、例えば筆者は P 個体に信用されていたとしても、筆者自身が P 個体の能力や成長の余地を低く見て甘やかし、信頼しきれていない部分があると思うように狩りを行えていない原因の 1 つであると言える。

したがって鷹狩りとは、もともと人間の世界とはかけ離れた位置に存在する鷹を人と共に行動できる状態にまで慣らし、その上で再び人から離し、鷹の主体性に任せて狩りを行う関係を構築するという「自立の再編成」だと言える。そして、鷹がその再編成を経て自立し狩りをするのは、人間側の成長

と自立が大きく関わっている。自分が訓練してきたのだからここまでしかできないだろうという思い込みや、愛着による過保護を鷹に押し付ける人間。人間が知らないだけで自ら学び、人知れず成長してきた鷹。一度人の飼育下で行動を制限された鷹は、人から愛着という足かせを付けられ、空へ羽ばたくための学びとチャンスを奪われる。それを再び大空へと自由に羽ばたき、狩りを行う鷹とするためには、鷹からの信頼のみを目的とするのではなく、人間が鷹を信頼し、そのうえで鷹への愛着から自立するという、鷹と共にある人間の成長を伴うことで、鷹は野生動物である本来の姿を取り戻すのである。

慣れと狩り、どちらかを捨ててひとつにしぼるだけなら簡単にできるが、双方の位置づけをされた鷹は、愛着という最も強力な足かせで拘束されることで野生の本能を奪われる。この愛着の解放という自立により、鷹が本能を発揮する場を得たうえで対等な関係を築き、共に狩りを行うパートナーとしての信頼関係を得るのである。

おわりに

憧れだった放鷹術を実際に学ぶことで、なぜ人間は言葉も通じない動物たちと共に行動でき、どのような過程を経ればそのような状態になるのかを身をもって体験することができた。そこにあったのは先祖代々受け継がれてきた知恵と技術、そしてそれを基礎としてそれぞれの個体にあった対応をするために、鷹と直接向き合って実践から学んでいくという、受け継がれてきた伝統に新しく付け加えられるノウハウが今まさに生みだされていく現場であった。そして目には見えないが鷹との信頼関係が確かに存在することを実感することを実感した。それはペットのように愛玩動物として最初から完成された関係ではなく、関わっていくうえで常に変化し、はっきりとした関係性をもたない曖昧さを含んでいたのである。

鷹をめぐる様々な立場の人と関わってきたが、オオタカにしろハリスホークにしろ、全ての人に共通して言えることは、みな自分のパートナーを 1 番に信頼し、ただひとつしかない関係性を築いているということである。そしてその信頼の先にある狩りを行うためには、人間の愛着という最も扱い難く、

尊い感情をコントロールしなければならない。それを乗り越えた先にこそ、人は鷹と共に狩りができるという真の信頼で繋がったパートナーになれるのである。

謝辞

本稿を作成するにあたり、沢山の方々、多くの鳥たちにお世話になりました。

放鷹術をご指導してくださった神内光示さん、地元で唯一同じ協会に所属し、猟に連れて行ってくださった中ノ園浩司さん、実演会で共に共演した協会の方々、そして鷹を訓練するにあたり命を捧げてくれた鳥たち。心より感謝しています。

人類学ゼミに所属し竹川大介先生と出会うことで、鷹と共に生きるという貴重な機会を得ることができ、またひとつ自分の夢を叶えることができました。論文を書くうえで、忙しいなか支えてくれたサポーターの方々には多方面から様々な手助けをしていただきました。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

参考・引用文献一欄

- 秋篠宮文仁・林良博 2009『家畜の文化』岩波書店
- 卯田宗平 2008「ウを飼いならず技法—中国・鶉飼いの漁におけるウの馴化の事例から—」『日本民俗学』, 254:85-114
- 上田恵介・岡ノ谷一夫・菊水健史・坂上貴之・辻和希・友永雅己・中島定彦・長谷川寿一・松島俊也(編)、2013『行動生物学辞典』東京化学同人
- 奥野克己・山口未花子・近藤祉秋 2012『人と動物の人類学』春風社
- 奥野卓司・秋篠宮文仁 2009『動物観と表象』岩波書店
- 片野修 1991『個性の生態学—動物の個性から群集へ』京都大学学術出版会
- セオドア・ゼノフォン・バーバー著、笠原敏雄訳 2008『もの思う鳥たち 鳥類の知られざる人間性』日本教文社
- 中村生雄 2010『日本人の宗教と動物観—殺生と肉食—』吉川弘文館
- 中山晶子 2003『親しさのコミュニケーション』くろしお出版
- 西川一廉・小牧一裕 2002『コミュニケーションプロセス』二瓶社
- 波多野鷹 1997『鷹狩りへの招待』筑摩書房
- 波多野鷹 2009『ザ・猛禽類 飼育・訓練・鷹狩り・リハビリテーション』誠文堂新光社
- 林良博・近藤誠司・高槻成紀 2002『ヒトと動物 野生動物・家畜・ペットを考える』朔北社
- B・ガンター著、安藤孝敏・種市康太郎・金児恵 2006『ペットと生きる—ペットと人の心理学—』北大路書房
- ハロルド・ハーツォグ著、山形浩生・守岡桜・森本正史訳 2011『ぼくらはそれでも肉を食う 人と動物の奇妙な関係』柏書房
- 本江昭夫 2009「家畜とは何か」(山本紀夫編『ドメスティケーション—その民族生物学的研究』84)97—115頁 国立民族学博物館
- 松井健 1997『自然の文化人類学』精興社